広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第37集

笹利迫田遺跡発掘調査報告書

1985

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第37集
笹利迫田遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁・行	誤	正
図版目次	図版４－ｂ（南西より）	図版４－ｂ（南西から）
挿図目次	第３図（１：3.０００）	第３図（１：３００）
６頁第３図	（１：3.０００）	（１：３００）
８頁26行	ＳＫ０１	ＳＢ０１
12頁５行	口縁部形	口縁部径
34頁28行	甕形土器D_1・D_2類	甕形土器Ｄ類
35頁註(5)	『広島県文化財調査報告』	『広島県文化財調査報告』第14集

笹利迫田遺跡発掘調査報告書

1985

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

目　　次

(I) はじめに …… (1)
(II) 位置と環境 …… (2)
(III) 調査の概要 …… (5)
(IV) 遺構と遺物 …… (7)
(V) まとめ …… (32)

例　　言

1) 本書は，昭和58年度に調査を実施した五日市ニュータウン造成事業に係る笹利迫田遺跡（広島県佐伯郡五日市町大字石内字迫田1569番地所在）の発掘調査報告である。
2) 発掘調査は，株式会社村上興産の委託を受け財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3) 出土遺物の整理，実測，図面の製図等は鍛治益生が中心となって行い，写真は鍛治が撮影した。
4) 貝類の同定は，広島大学理学部附属向島臨海実験所長稲葉明彦氏，石材の同定は，広島大学理学部地質鉱物学教室柴田喜太郎氏に依頼した。
5) 本書使用の遺構略号は以下のとおりである。SB：住居跡，SK：土壙。
6) 本書に掲載した第1図は，建設省国土地理院発行の50,000分の1（広島）を使用した。
7) 本書の執筆は，(I)～(III)，(IVの出土土器を除く)，(V-1) 鍛治，(IVの出土土器)，(V-2) 妹尾周三が分担して行い，鍛治が編集した。
8) 当センターは，昭和53（1978）年に設立して以来，今日まで調査報告書を36冊刊行してきたが，このたび報告書の保管，利用上の便宜を図るため，今後発刊する報告書には通し番号を記載することとした。

図 版 目 次

図版 1-a　調査前近景（南から）
図版 1-b　調査後近景（南東から）
図版 2-a　SB 01（北東から）
図版 2-b　SK 02（東 から）
図版 3-a　SK 03 土器出土状況（西から）
図版 3-b　同上 完掘状況（西から）
図版 4-a　貝塚検出状況（南西 から）
図版 4-b　同上（南西より）
図版 5　SK 03 出土土器（I）
図版 6　SK 03 出土土器（II）
図版 7　SK 03 出土土器（III）
図版 8　SK 03 出土土器（IV）
図版 9　貝塚出土土器（I）
図版 10　貝塚出土土器（II）
図版 11　貝塚出土土 器・鉄器・SB 01 出土石器
図版 12　出土した主要貝類

挿 図 目 次

第 1 図　五日市町主要遺跡分布図（1：50,000）……（2）
第 2 図　遺跡周辺地形図（1：2,000）……（5）
第 3 図　調査区域内地形測量図（上），遺存図（下）（1：3,000）……（6）
第 4 図　SB 01 実測図（1：60）……（7）
第 5 図　SB 01 出土石器実測図（1：2）……（8）
第 6 図　SK 02 実測図（1：60）……（8）
第 7 図　貝塚断面図（1：60）……（9）
第 8 図　SK 03 及び土器出土状態実測図（1：30）……（9）
第 9 図　貝塚出土鉄器実測図（1：2）……（9）
第10図　出土土器分類図（1：4）……（13）

第11図　SK 03 出土土器実測図（Ⅰ）（1：3）……(14)
第12図　SK 03 出土土器実測図（Ⅱ）（1：3）……(15)
第13図　SK 03 出土土器実測図（Ⅲ）（1：3）……(16)
第14図　SK 03 出土土器実測図（Ⅳ）（1：4）……(17)
第15図　SK 03 出土土器実測図（Ⅴ）（1：3）……(18)
第16図　貝塚出土土器実測図（Ⅰ）（1：3）……(19)
第17図　貝塚出土土器実測図（Ⅱ）（1：3）……(20)
第18図　貝塚出土土器実測図（Ⅲ）（1：3）……(21)
第19図　貝塚出土土器実測図（Ⅳ）（1：3）……(22)

(I) はじめに

広島県佐伯郡五日市町は，広島市の西隣りに位置して人口約96,400人（昭和59年8月現在）を有する町で，町単位の人口規模としては全国第1位の自治体である。これは昭和30年代後半からの高度経済成長政策の推進と相俟って急速に広島市の都市化が進行し，それにつれて市街地及び宅地が周辺部に拡大する傾向が現われ，周辺市町村にもこの傾向が波及したためである。なかでも五日市町は気候温暖，都心部への交通の至便さから宅地化が急激に進行し，現在もこの傾向が続いている。なお，五日市町は昭和60年3月20日，広島市と合併する予定である。

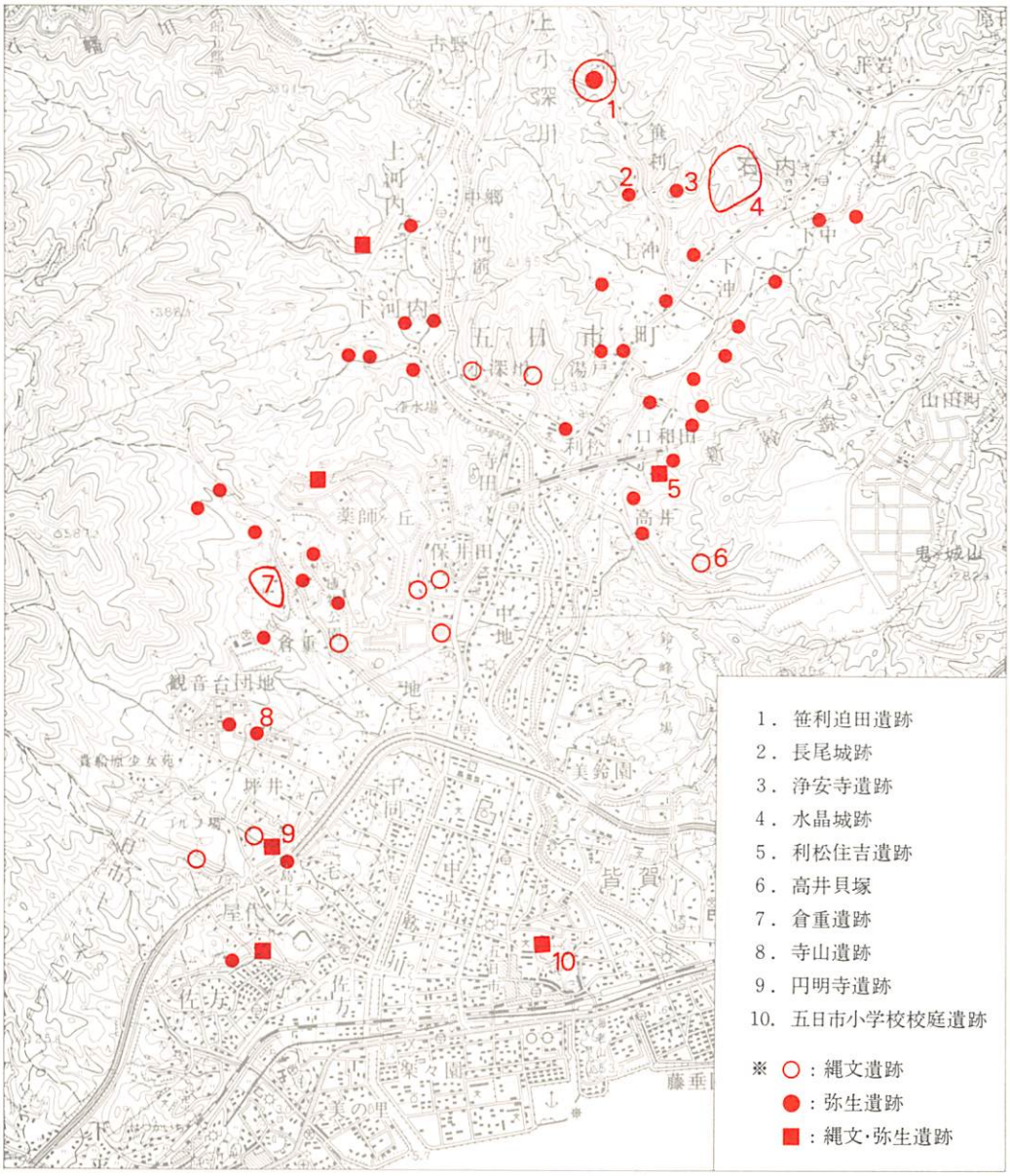
このような状況下にあって，昭和49年9月，村上興産株式会社（以下「村上興産」という。）から広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に，五日市町石内(いしうち)字笹利(ささり)から同町上河内字中郷付近にかけての山林約60haの宅地造成計画に伴う文化財の有無ならびに取扱いについての照会があった。このため県教委は当該地の分布調査を実施したが遺跡は確認されなかった。その後，昭和50年5月に広島県は諸般の事情から五日市町石内地区の開発を凍結したが，村上興産は昭和57年12月に宅地造成の許可を受け，翌年4月に工事に着手した。ところが翌5月になって進入路の工事中に多量の貝及び土器が発見された。工事は前述のようにすでに進行しており，設計変更等による現状保存は困難なことから財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に発掘調査の依頼があった。センターでは，昭和58年度事業はすでに年間計画のもとに発掘調査を実施中であるため，現段階では調査は不可能であるが，以後の調査計画に変更が生じた場合は再度協議する旨の回答をした。その後，再び調査の依頼があり，調査が可能となったことから委託契約を締結し，調査は昭和58年11月4日から12月2日までの1か月間，センターの鍜治益生，辻 満久があたった。なお，本遺跡の名称は調査時においては笹利迫田(ささりさこだ)貝塚としたが，調査の結果，後述のように貝塚のほかに住居跡が存在することから，遺跡の性格上，名称を笹利迫田遺跡とした。

本報告は，今回の調査の成果をまとめたもので，弥生時代後期の資料を収録したものである。本報告書が学術研究にとどまらず，当地域研究の新たな資料として多くの方々に活用されれば幸いである。

調査にあたっては，五日市町教育委員会，村上興産，株式会社青木建設ならびに地元の方々に多大な御協力を得た。また広島大学理学部附属向島臨海実験所長 稲葉明彦，広島大学理学部地質鉱物学教室 柴田喜太郎の各氏から御教示を得た。末筆ながら記して謝意を表したい。

(II) 位 置 と 環 境

笹利迫田遺跡は，広島県佐伯郡五日市町大字石内字迫田に所在する。五日市町は南を瀬戸内海に面し，他の三方は釈迦ヶ岳，窓ヶ山，極楽寺山の各山塊に取り囲まれ，東は広島市西区，北は安佐南区，佐伯郡湯来町，西は廿日市町と境を接する。これらの山塊は標高 300～700 m を測る高位瀬戸内面の丘陵に属し，山麓には低位瀬戸内面，扇状地形等の丘陵群が展開する。



第1図 五日市町主要遺跡分布図（1：50,000）

一方沖積地は，極楽寺山塊と窓ヶ山山塊とを横断する八幡川とその支流の石内川流域及び八幡川，三筋川両河川の河口部に当る現在の市街地付近に広がる。なお山陽本線以南の地域は近世以降の埋立てによって新たに開かれた地域である。

ところで五日市町内の遺跡分布を概観すると，旧石器時代に属する遺跡はその実態について不明確な部分が多いが，最近の発掘調査で倉重(くらしげ)2号遺跡より弥生土器などと共に安山岩製舟底形石器1点が出土した。なお，他に同時期の遺物がないため詳細は不明である。また，昭和45年に調査が実施された同町三宅所在の円明寺(えんみょうじ)遺跡[1]の表採資料中に有茎尖頭器1点が含まれており，旧石器時代末から縄文時代初頭頃の遺物である可能性が指摘されている[2]。

縄文時代については先述の円明寺遺跡をはじめ，町内で15遺跡が確認されている。その分布状況は市街地西側の極楽寺山塊の比較的比高の低い丘陵先端部を中心に展開している。このうち遺跡の内容が明らかな遺跡にはまず円明寺遺跡[2]がある。本遺跡は縄文早期～前期，後期～晩期にかけての土器・石器類が出土したが，後世の攪乱のため遺構及び堆積状況については明らかではない。また同町利松所在の利松住吉(としまつすみよし)遺跡[3]は昭和41年発掘調査が行われ，4層の包含層が確認され，縄文早期の土器を中心に石器などが層序的に出土した。一方，同町五日市所在の五日市小学校校庭遺跡[4]は，昭和25年運動場拡張工事の際，縄文中期～後・晩期にかけての土器が出土した。本遺跡は当時陸地に近接した内海上の小島で，同時代人の生活圏が内海島嶼部に及んでいた点，広島市所在の比治山貝塚と同様な傾向を示している。

弥生時代の遺跡は，主として散布地を中心に町内約100ヶ所以上の所在が知られているが，その大半は後期に属するもので前・中期に溯るものは僅少である。また，その分布状況は縄文時代同様，周辺山麓に展開するとともに新たに小さな谷斜面や比較的標高の高い丘陵上にまで進出する傾向を示す。現在まで大規模な発掘調査例は少ないが，近年の調査によって同時代の集落の状況が次第に明らかとなりつつある。昭和44年発掘調査が行われた同町坪井所在の寺山遺跡[4]では弥生時代後期の円形住居跡1軒を検出したほか，箱式石棺1基を確認した。このうち住居跡は直径約5mで主柱穴は3ヶ所確認するとともに，炭化した柱材が残存しており，このことから火災に遭遇したものと推定された。また，石棺については伴出遺物がないもののこの住居跡と近接することから同時期のものと想定している。一方，昭和47年新幹線工事に伴い調査が実施された利松遺跡[5]からは弥生時代前期及び後期の土器片が少量出土している。この遺跡は二次堆積によって形成されたものと推定されており，縄文土器・尖頭器などが混在した状況で出土した。ただ，この遺跡は石内川との比高6～7mで扇状地扇端部に位置し，初期農耕には適した地であったことがうかがわれる。

ところで，笹利迫田遺跡調査の前後に山陽自動車道建設工事に関連して，石内周辺で長尾城跡・水晶城(すいしがじょう)跡・浄安寺(じょうあんじ)遺跡など一連の調査が実施された[6]。この3遺跡とも弥生時代後期の遺構・遺物が確認されたが，とくに浄安寺遺跡では丘陵尾根線上ならびに斜面にかけ，後期に属する住居跡約60軒以上を検出した。これらの住居跡は，群構成をなすとともにこれに付属する貯

蔵穴が伴うことが明らかとなっており，本地域における狭小な谷水田を生産基盤とした集団の社会構造が解明されるものと期待されている。

古墳時代になると，古墳は知られているが集落跡，生産遺跡などの遺跡の分布は現時点では明らかではない。古墳の分布についても現在把握されているものは少なく，弥生時代の遺跡が比較的知られているのに対してあまりにも少なすぎる感を呈する。ただし古墳の分布状況では丘陵先端付近に位置するものが多く，とくに交通の要衝などに点在することが注目される。このうち同町三宅所在の三宅古墳[4]は，西広島バイパス建設に伴い発見された横穴式石室を内部主体とする古墳で，後世の攪乱を受けてはいたものの，内部主体から須恵器，鉄刀，鉄鏃，耳環などが出土した。また，倉重所在の倉重古墳[7]は昭和47年に調査が実施され，横穴式石室を内部主体とすることが明らかとなった。玄室床面は偏平な石を敷いたうえに炭を敷く特徴をもつ。遺物は玄室内より須恵器7点が出土した。

古代・中世の遺跡には最近の調査で，8世紀後半の官衙跡と推定された中垣内(なかがいち)遺跡[8]や，鎌倉期の瓦類が出土した円明寺遺跡があるほか，中世山城跡，古墓の存在が知られている。とくに当地域は戦国期末の大内・毛利両氏の勢力が衝突を繰返した地で，瀬戸内海を臨む山頂付近や交通の要衝となる谷頭の丘陵上に展開する。このうち同町石内所在の水晶城跡[9]は本丸を中心に4方向に多数の郭・堀切などを配する大規模な山城でその重要性をうかがわせている。また昨年調査された長野遺跡[10]は16世紀中葉頃の屋敷跡と考えられている。

参考文献

(1) 広島県教育委員会 『円明寺（延命寺）遺跡発掘調査報告』 昭和46（1971）年。

(2) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会 『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 III 昭和59（1984）年。

(3) 川越哲志 『広島県佐伯郡五日市町利松住吉遺跡の調査』「広島大学文学部紀要」 第28巻1号 昭和43（1968）年。

(4) 五日市町誌編集委員会 『五日市町誌』 上巻 昭和49（1974）年。

(5) 広島県教育委員会 「利松遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』 昭和48（1973）年。

(6) 昭和58（1983）年，当センターが発掘調査を実施した。

(7) 広島県教育委員会 「倉重古墳」『広島県文化財調査報告』 第14集 昭和58（1983）年。

(8) 五日市町教育委員会 『中垣内遺跡試掘調査概要』 昭和60（1985）年。

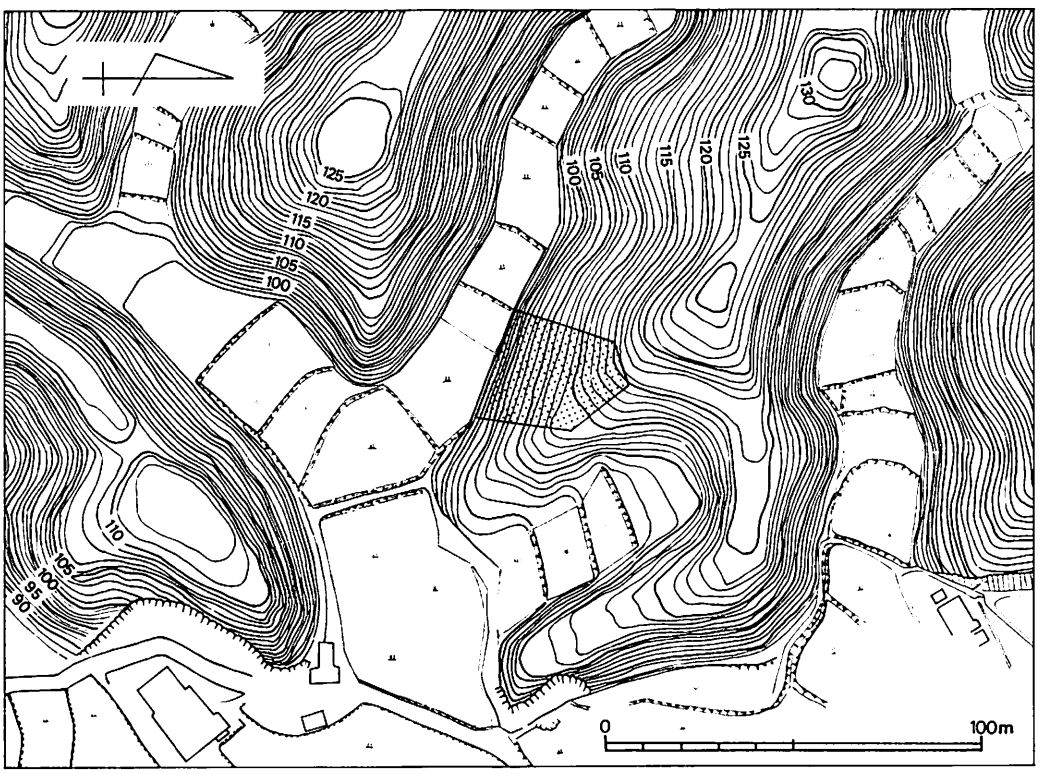
(9) 西本省三・葛原克人編 『日本城郭大系 第13巻 広島・岡山』 昭和55（1980）年。

(10) 五日市町教育委員会 『長野遺跡発掘調査概報』 昭和60（1985）年。

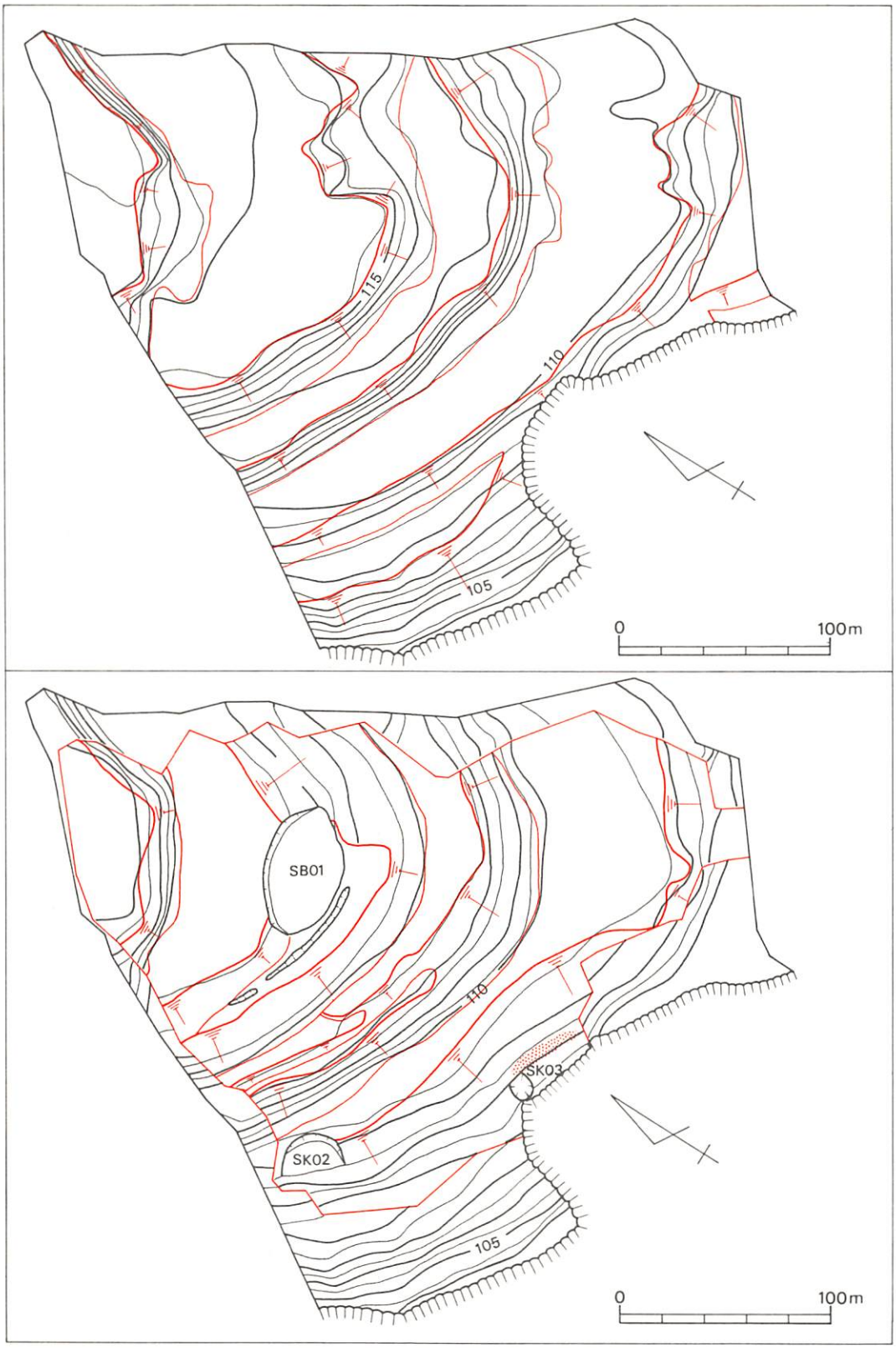
(III) 調 査 の 概 要

笹利迫田遺跡は，石内川の支流笹利川の開析作用によって形成された南北に狭長な笹利の谷のやや奥まった場所に位置し，北西方向より派生した丘陵先端部の急傾斜面上に立地する。本遺跡は標高 105～115 m の丘陵上にあり，周辺部には狭小な谷水田が湾入し，これらの水田面との比高差は 10～20 m である。遺跡周辺は本来急斜面となっていたものを階段状に畑地化したものであったが，現状では雑木が生い茂る荒地となっていた。

遺跡は，今回の発掘調査の直接的契機となった貝塚を斜面中位で確認していたほか，調査前の試掘調査で調査区最高所より一段下った尾根筋上の畑地から住居跡状の落込みを確認していたため，調査はこの丘陵先端の尾根線から南側斜面にかけ約 600 ㎡ を対象に実施した。なお，調査にあたっては遺跡が急斜面に立地することから土層観察用畦畔を尾根筋に沿って 1 本設定するにとどめた。調査の結果，試掘で確認された住居跡（SB 01）のほか，貝塚から北西約 12 m 離れて貯蔵穴らしき土壙（SK 02），また貝塚下層から掘込み多量の土器が出土の土壙（SK 03）を検出した。



第 2 図　遺跡周辺地形図（1 : 2,000）（アミ目 : 調査範囲）

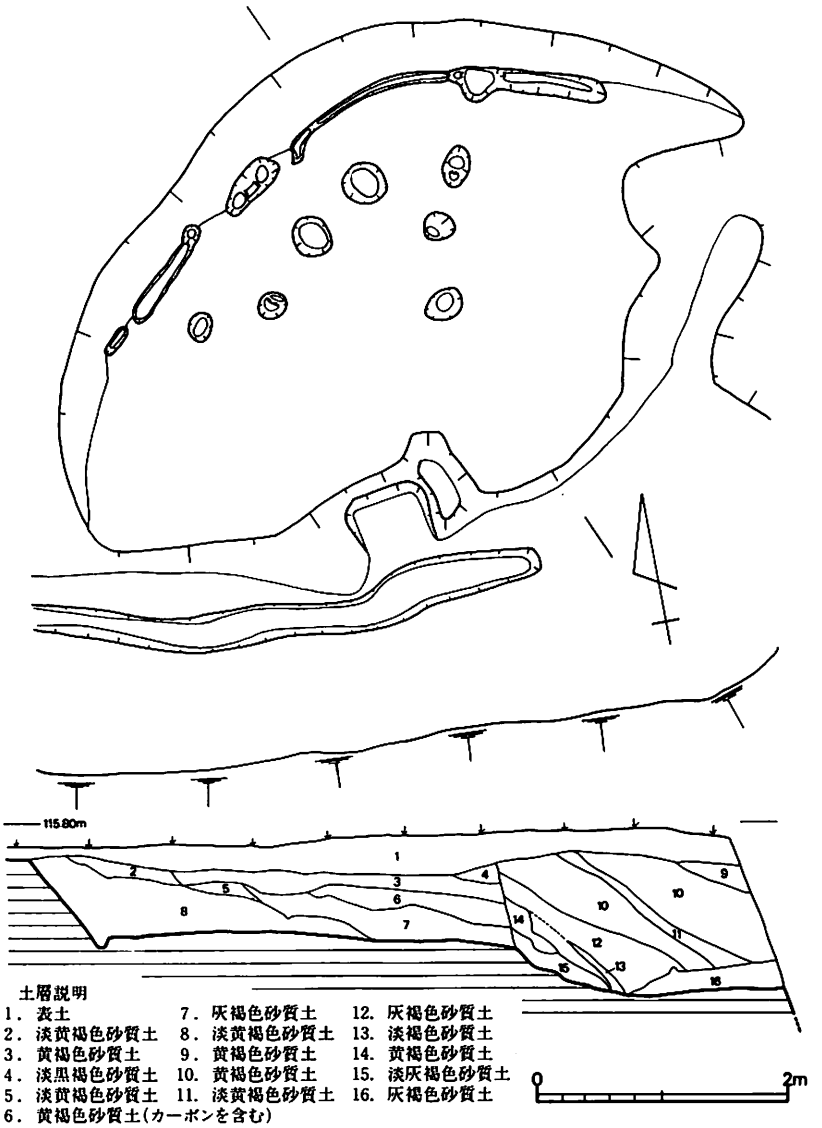


第3図　調査区域内地形測量図（上），遺存図（下）（1：3,000）（アミ目：貝塚）

(Ⅳ) 遺 構 と 遺 物

SB 01 （第4図，図版2）

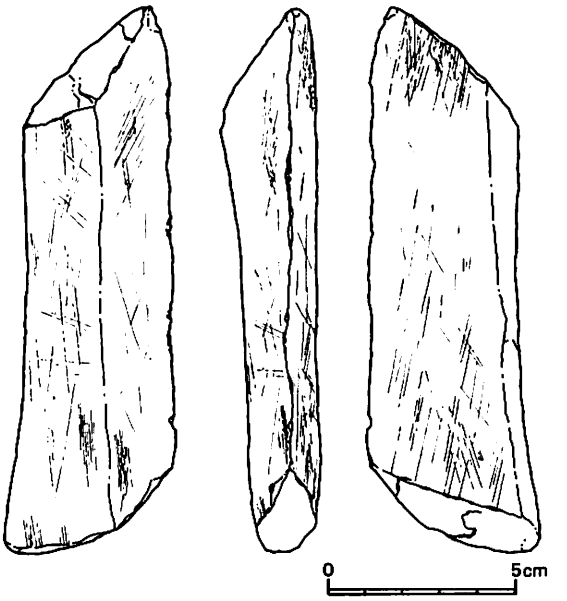
調査区最高所から一段下った標高約115 m の畑地の先端部で検出した円形の竪穴住居跡で，南半部は，後世の攪乱等で著しく流失していた。遺存状態の良好な北半部では住居跡床面からの壁高が約60 cm で，約65度の角度で立上る。床面はやや南東方向に傾斜していたが，貼床等の痕跡は認められなかった。壁際には幅8～12 cm，深さ1～9 cm で壁溝が途中途切れた状況で



第4図 SB 01 実測図（1：60）

廻っており，壁溝中より小ピット4を検出したが，配列には規則性は認められない。また，床面より径20～30 cm，深さ17～59 cmのピット7を検出したが，南半部流失により柱の対応関係が把握できず，主柱穴は明らかにできなかった。なお，出土遺物は住居跡覆土中から弥生土器小片を少量と砥石1点が出土したのみである。

ところで，本住居跡南側より西側にかけ，幅約2.5 mの平坦面が造成されているが，これは現畑地開墾以前に開かれた畑地で，この平坦面より検出した溝状遺構についてもこの時期に属するものと考えられる。



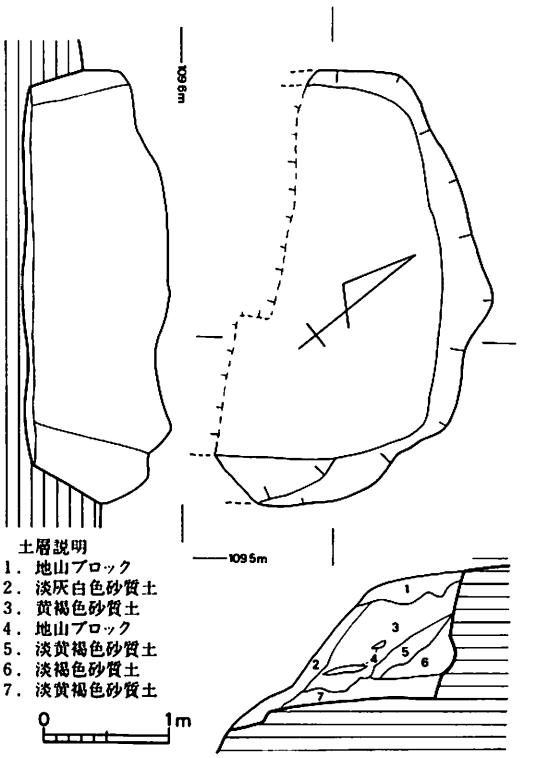
第5図　SB 01 出土石器実測図（1：2）

出土遺物　（第5図，図版11）

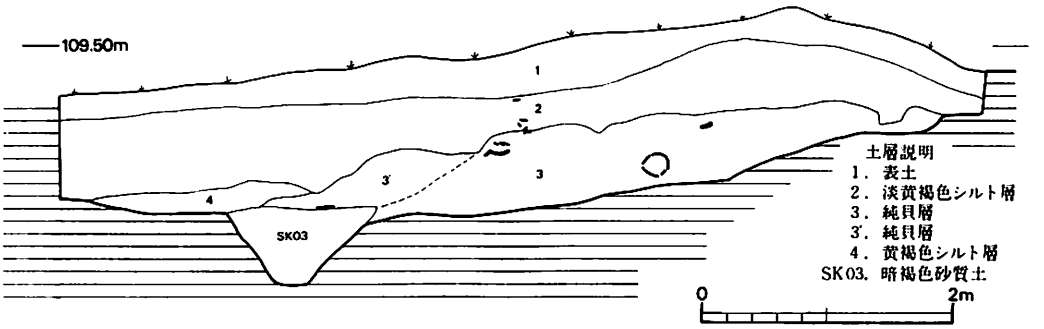
砥石　縦長の砂岩系ホルンヘルスを石材として使用したもので，長さ14.4 cm，幅3.9 cm，重さ175.7 gで，断面は菱形を呈する。側面にあたる三面上には長軸方向に擦痕が遺存するが，両端部については擦痕は認められない。

SK 02　（第6図，図版2）

SK 01から約10 m下った標高約109 mの南向き斜面に検出した土壙で，急傾斜面上に位置するため，南西半部は流失している。遺存状況の良好な北半部では，平面形は隅が丸く「コ」字状を呈していることから，本来，隅丸方形を呈すると推定される。北辺上端の長さ3.4 m，下端の長さ2.9 m，深さ1.0 mで，北壁及び東西壁は床面より



第6図　SK 02 実測図（1：60）



第7図　貝塚断面図（1：60）

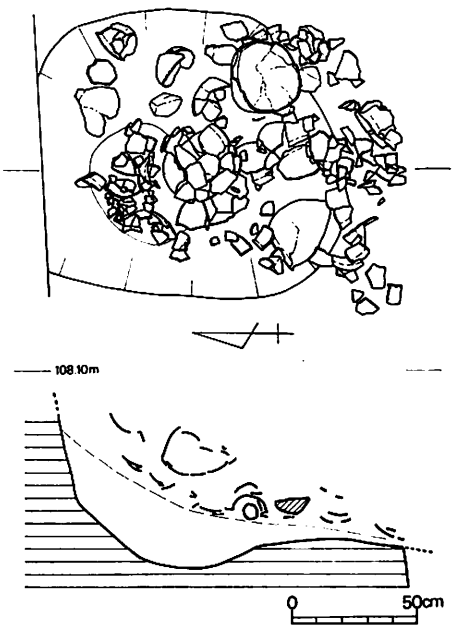
ほぼ垂直に立上る。床面はほぼ平坦で，何ら施設をもたない。土壙の覆土は暗褐色・褐色系の砂質土で何ら遺物を包含しないが，床面直上からわずかに炭の層が認められた。なお本土壙の性格については遺構の半分以上が流失し，遺物が皆無であることから明確にはしがたいが，底面にわずかな炭の層が遺存していた状況から貯蔵穴であった可能性が考えられる。

SK 03　（第8図，図版3）

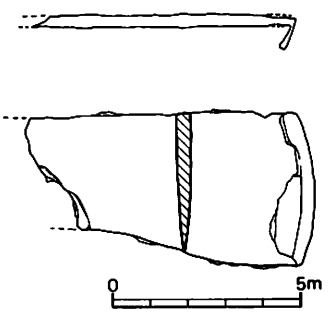
SK 02の南東方向に約5.5 m離れた貝塚より検出した土壙である。本遺構は土取り工事の際，上半部を著しく削平されており本来の規模を明らかにはできないが，現状では長径1.2 m，短径1.1 m，深さ0.6 mの楕円形を呈する。本遺構は，貝塚の断面を精査の結果，この斜面に貝が投棄され始めた初期の段階に貝層を掘込んで造られたもので，出土土器が底面より浮いた状況にあり，また土器に伴って貝が混入していることから，本遺構掘削後一定期間を経過した後，土器を貝類とともに投棄したものと考えられる。

貝塚　（第7図，図版4）

標高約108 m付近の南東急斜面に堆積していたもので，発見後の崩落によりややオーバー・ハン



第8図　SK 03及び土器出土状態実測図（1：30）



第9図　貝塚出土鉄器実測図（1：2）

グした状況を呈していた。発見時の状況等が明確でないため本来の規模等については不明である。本貝塚については当初何らかの遺構の廃棄に伴って投棄されたと考えていたが，調査の結果，貝塚形成初期に掘込まれたSK 03以外に何ら遺構の痕跡を留めず，自然傾斜面に投棄された状況にあった。現状で明らかにできた貝塚の規模は幅5.5 m，最も厚い部分で0.7 mであった。貝塚は，上面及び下面でやや土が混入し締った状況を呈し，中位にかけては，ほとんど土を含まず，純貝層の状況を呈しているが，分層できるほどのものではなかった。また貝種に関しても上層より下層にかけて際だった相違は認められず，マガキを主体（全体の約90%）にアサリ，ハマグリ等の二枚貝，マテ貝等の巻貝類など，岩礁及び砂泥等に生育する海水産を主体に，若干の淡水産の貝類が認められた。一方貝層中には土器片等が混入しており，とくに上層においてその傾向は強いが，ほとんどの土器片が細片であることなどから斜面上方よりの流れ込みと思われる。また，鉄製の鎌1点が貝層中位付近より出土している。

出土遺物（第9図，図版11）

鎌　残存長7.7 cm，鋒幅0.4 cm，幅3.7 cmであり，鋒部はほぼ直線的で，刃部はやや内湾する。端部は約1 cm折返し，柄装着部を造り出す。

出土土器（第11～19図，図版5～11）

本遺跡から出土した土器には壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器がある。すでに述べたように，尾根上で検出された住居跡および土壙からの出土土器は各々少量であり，床面直上に遺棄[1]された資料で図化されるほどのものはない。しかし，SK 03および貝塚からは多量の土器を検出した。ただSK 03の土層状態についてみると，土器の間に貝類の混入が認められ，貝層からの二次堆積も予想されたが，明確な層位学的区分による個々の取り上げはできなかった。このため，両者より出土した土器を一括し，個々の形態によってはこの時期の特徴として分類上難しいものも存在するが，次のように分類を行った（第10図）。なお，個々の土器の特徴については観察表のとおりである。

壺形土器（1～4・6～8・44～46・71）

形態から5類に大別が可能である。

A類（44・71）　いわゆる二重口縁である。なお，形態により，さらに2類に細別が可能である。

A_1（71）　口縁部は内傾し，外面に波状文をもつ。体部は倒卵形を呈すると思われる。

A_2（44）　口縁部は内傾するが，無文と思われる。頸部は長く外反し，体部は球体形を呈している。

B類（45）　口頸部は外反し，端部は丸くおさめる。体部は球体形を呈すると思われる。

C類（8）　口縁部は外反し，端部は平坦である。体部は長く，底部は丸底状の平底であ

る。

D類（1～4・6・46）　口縁部径と器高との比が1：1前後のもので，球体状の体部をもち，口頸部が器高の3分の1近くに達する。鉢形土器B_2類に類似する形態のものがみられるが，口縁部径・胴部最大径に対して頸部径が小さなものを本類とした。口縁部の形態から，さらに2類に細別が可能である。

D_1（1～4）　口頸部は外反し，端部は平坦なものと丸くおさめるものがある。底部は平底または上げ底である。

D_2（6・46）　口頸部は外反し，端部は丸くおさめる。底部は丸底を呈し，中央部が若干凹むものと，尖底のものがある。

E類（7）　長頸壺形土器である。口頸部は長く外反し，上方にのびている。体部は球体形を呈すると思われる。

甕形土器（9・11・14～36・48～50・54～66）

形態から6類に大別が可能である。

A類（28・56）　口頸部は外反し，端部は平坦である。器壁は頸部が厚く，口頸部は薄い。胴部最大径は上半部にみられ，以下は極端にすぼまっている。

B類　形態・調整手法によって3類に細別できる。

B_1類（16～18・20・60・62・63）　口頸部は外反し，端部は平坦である。胴部は長胴である。

B_2（19・22・23・30～32・54・55・57～59・61・64）　口頸部は外反し，端部は平坦となっている。体部は倒卵形で，底部は小さな平坦または上げ底である。

B_3（29）　外面にタタキ目，内面に板状工具によるナデがみられる。

C類（9・14・15・21・24～27・33・48）　器形の大小により，さらに2類に細別が可能である。

C_1（14・15・21・24～27・33）　大型品である。口頸部は外反し，端部は尖り気味に丸くおさめている。体部は倒卵形だが，底部は平底である。

C_2（9・48）　小型品である。口頸部は外反するが短い。体部は倒卵形だが，平底または尖底気味の丸底である。

D類（11・49・50・66）　小型品である。口頸部は外反し，体部中位以下が極端にすぼまる。底部は丸底または平底である。

E類（36）　外反する口縁部を上方に拡張し，体部は倒卵形である。

F類（34・35・65）　一度外反する擬口縁を作り，その上に再度外反する口縁部をもつ。

鉢形土器（5・10・12・13・37～41・47・51～53・67～70）

形態から6類に大別が可能である。

A類（10・13・51）　口頸部は短く外反し，体部は球体状によく張る。底部は丸底状の平底

である。

B類（5・12）　口頸部は短く外反し，端部は丸くおさめている。器壁が全体的に厚く，底部は平底である。

C類　形態によって2類に細別できる。

C_1類（5・47）　壺形土器D類に類似するが，口縁部形・胴部最大径に比べ頸部径が若干大きい。

C_2類（52）　口縁部径と器高との比が1：1前後で，胴部最大径よりも口縁部径の方が大きい。口頸部は外反し，底部は丸底である。

D類（53）　大型品である。口頸部が外湾し，端部は肥厚している。体部はあまり張らず，下半部が極端にすぼまると思われる。

E類（37・67）　椀状を呈するもので，底部の形態により，さらに2類に細別が可能である。

E_1類（67）　底部が平底である。

E_2類（37）　口縁部径と器高の比が1.5：1前後のものである。底部は平底である。

F類　ボール状を呈するものである。形態により3類に細別できる。

F_1類（68）　底部が尖底状の平底である。

F_2類（39～41）　口縁部径と器高の比が1：1前後のもので，底部は尖底状の丸底である。

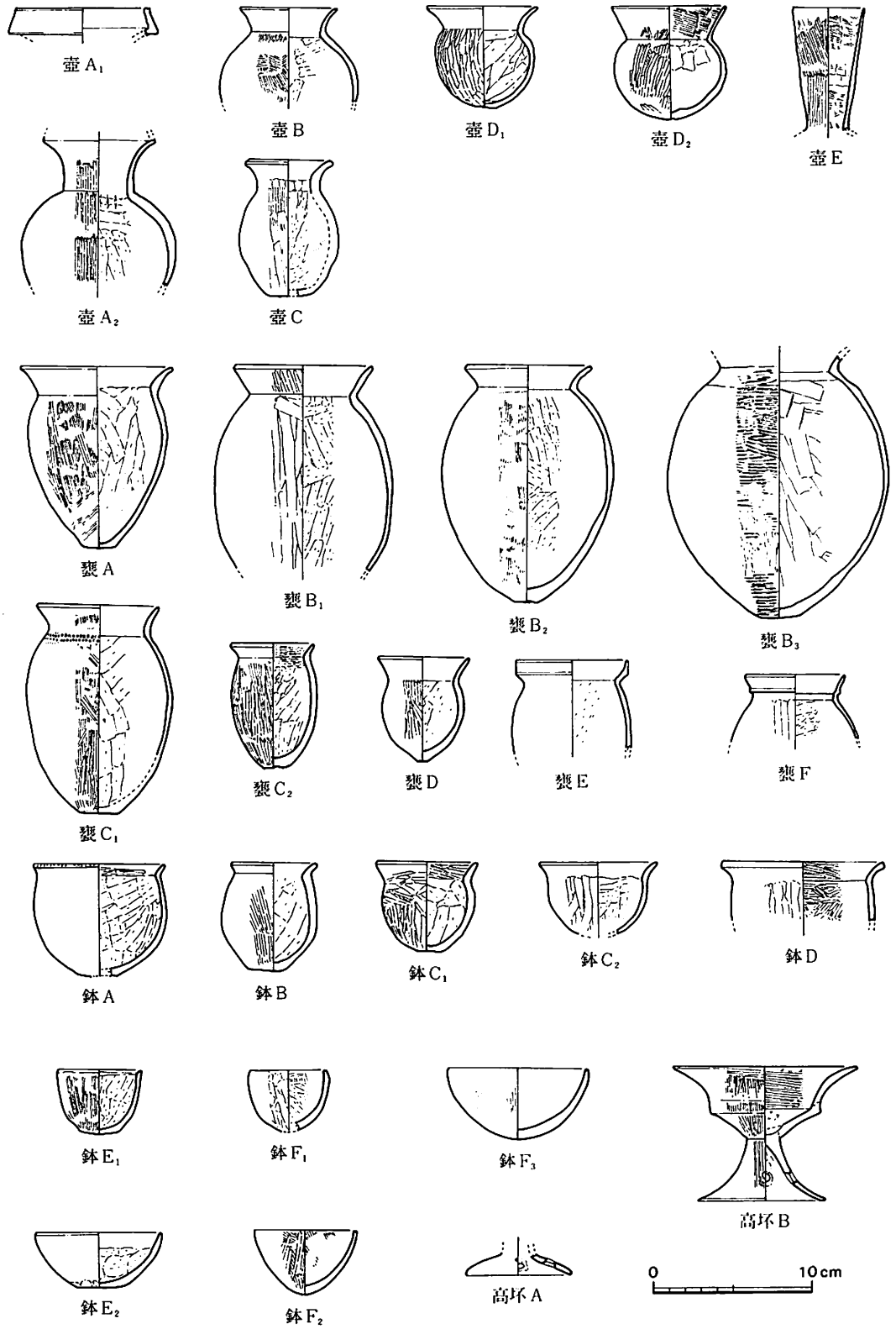
F_3類（38・69・70）　口縁部径と器高の比が1.5：1前後のものである。底部は丸底または尖底状の丸底である。

高杯形土器（72・73）

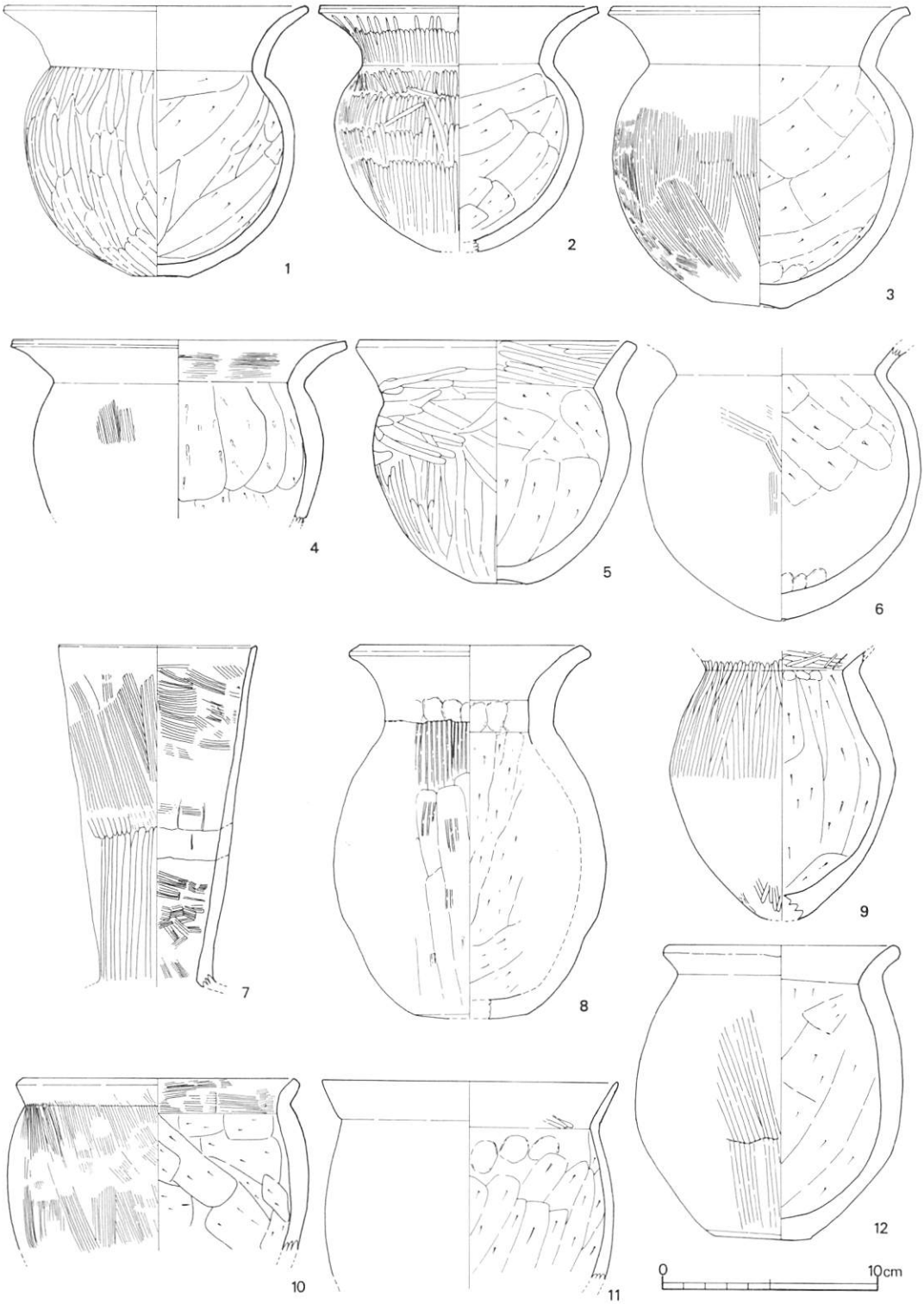
形態から2類に大別が可能である。

A類（72）　脚柱部は細く，脚部は外反気味に強く開く。透孔は4ヶ所にみられ，内面にはラセン状のハケ目を施している。

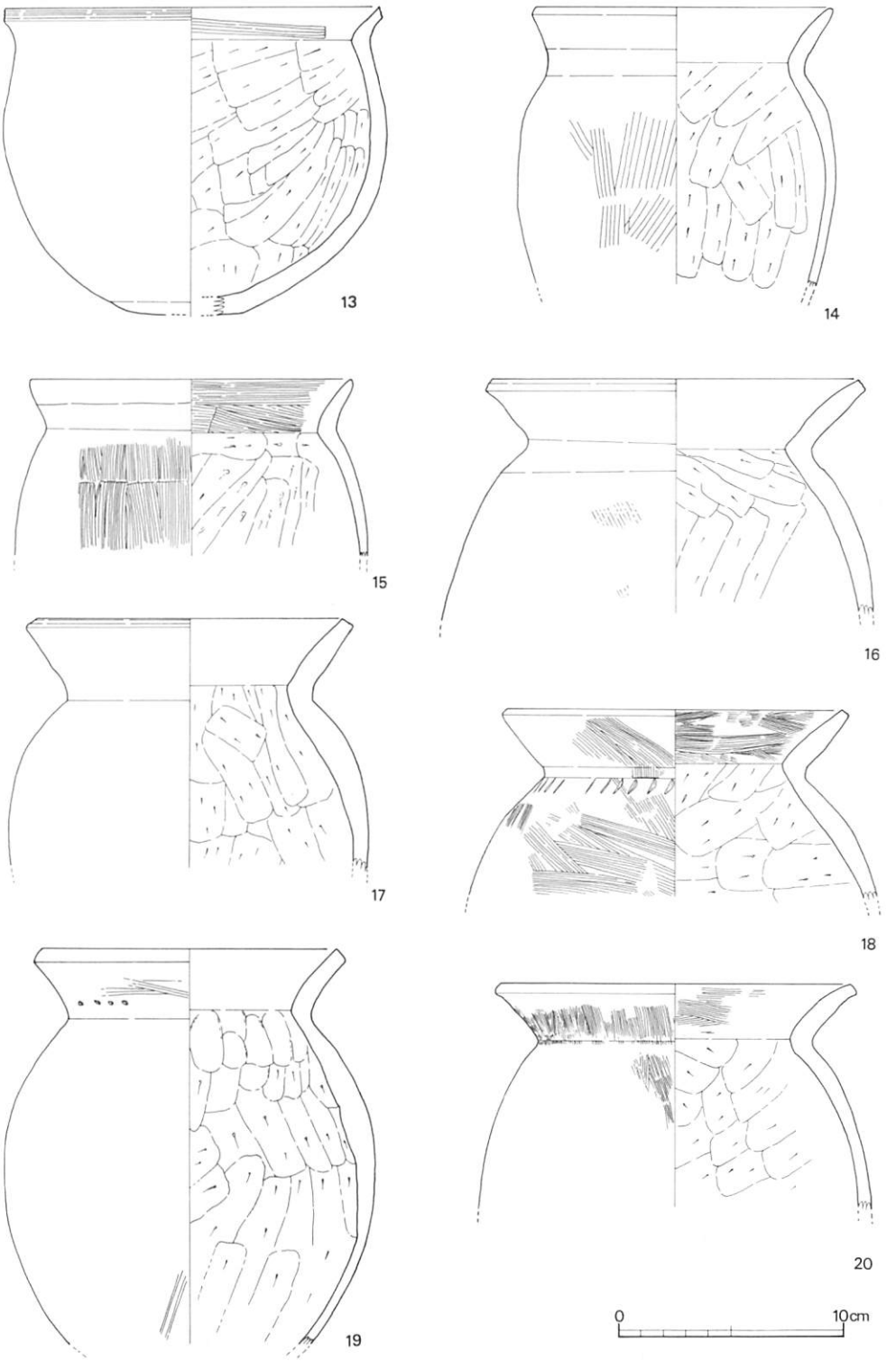
B類（73）　杯部は口縁部が外反し，杯底部との境に明確な段をもつ。脚部はラッパ状に開き，透孔は4ヶ所にみられる。端部は杯，脚部とも尖っている。



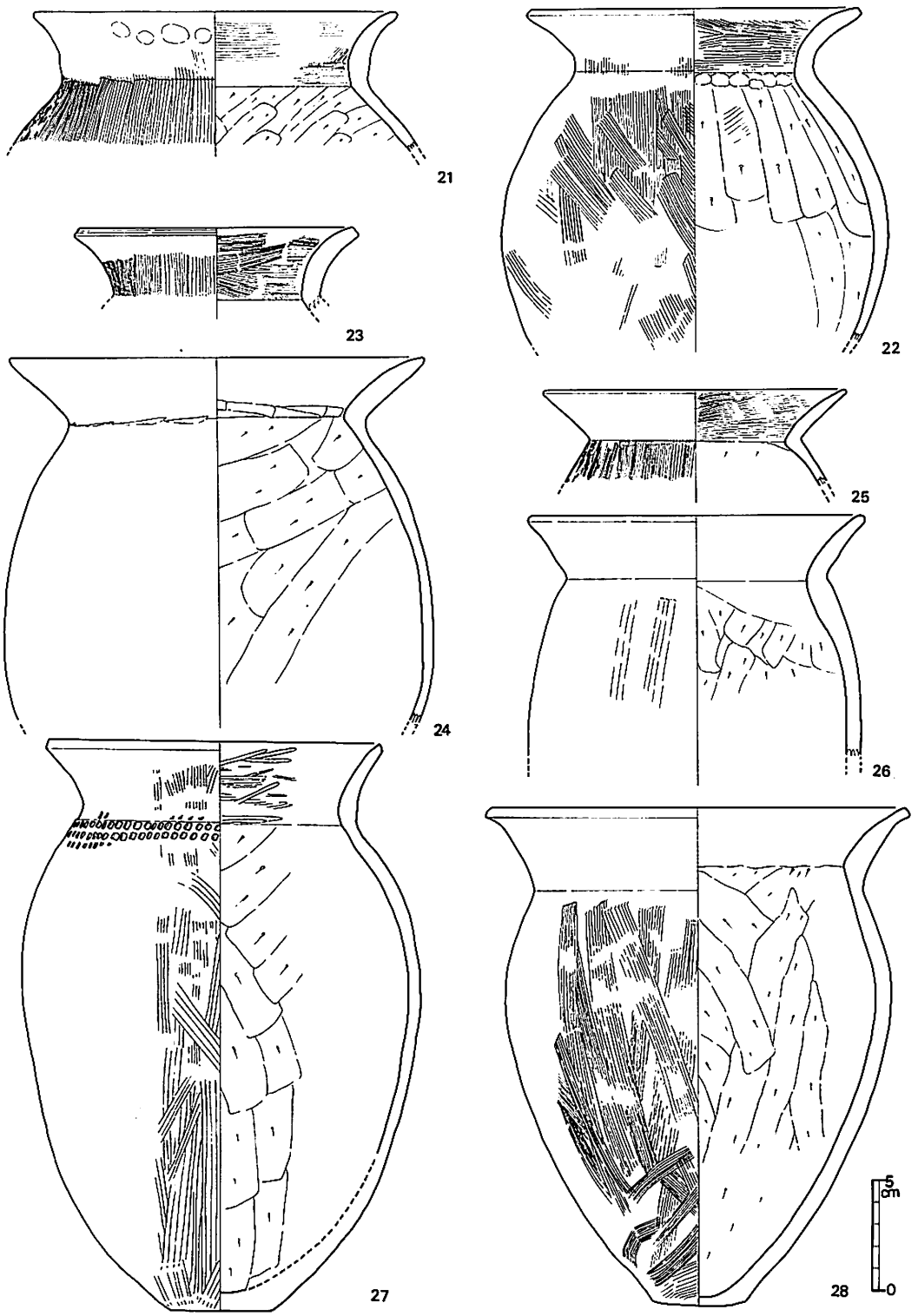
第10図 出土土器分類図（1：4）



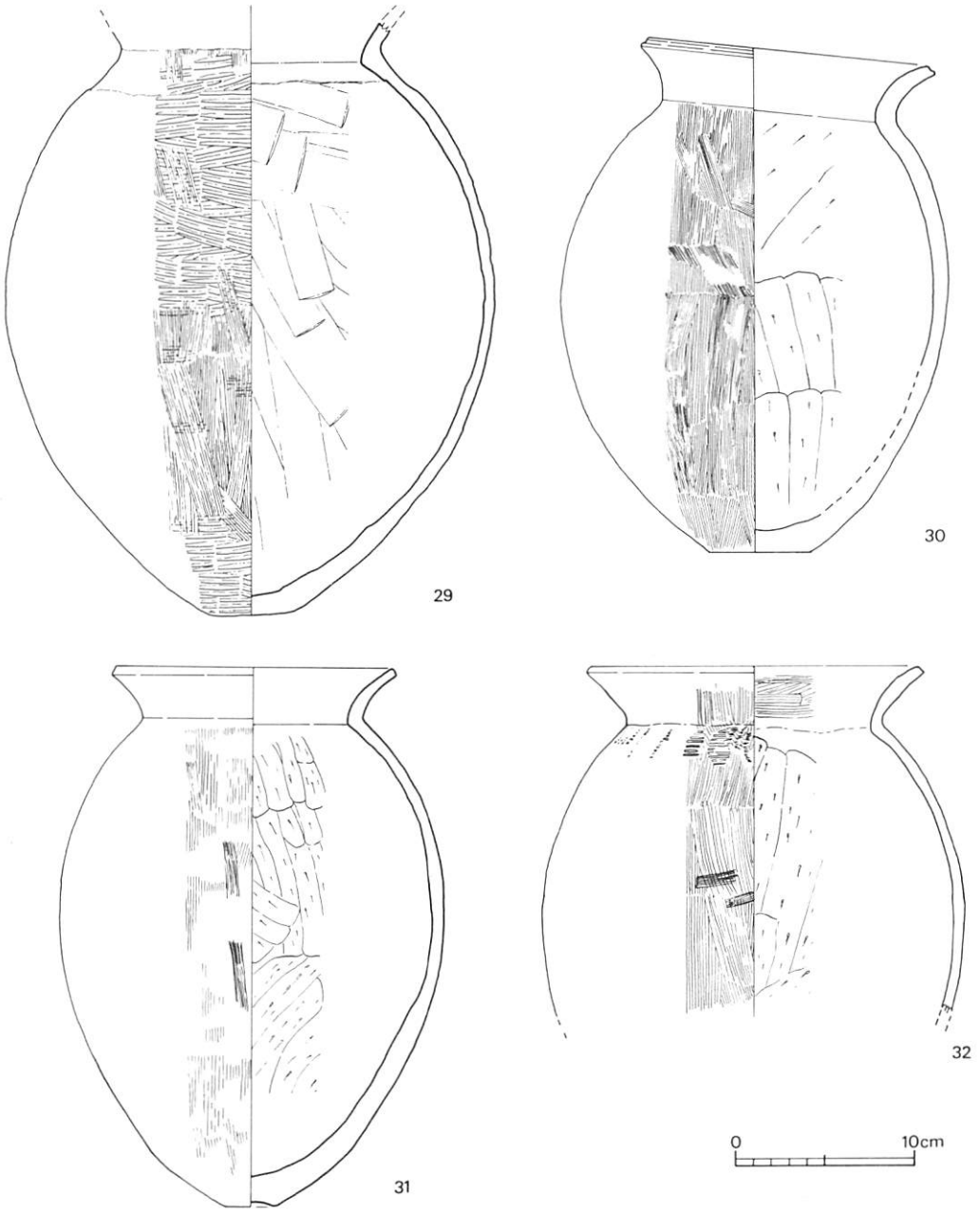
第11図　SK 03 出土土器実測図（I）（1：3）



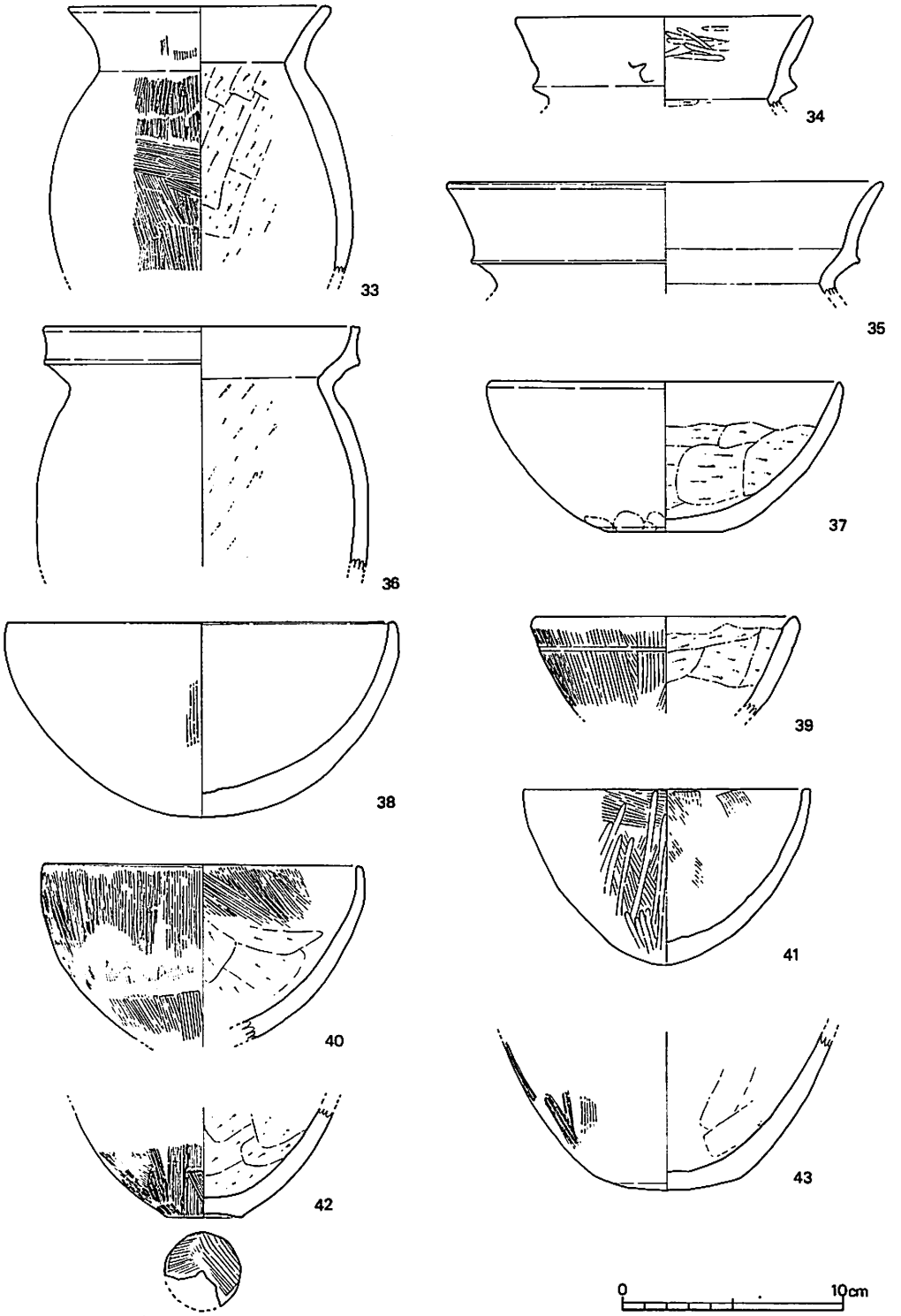
第12図　SK 03 出土土器実測図（II）（1：3）



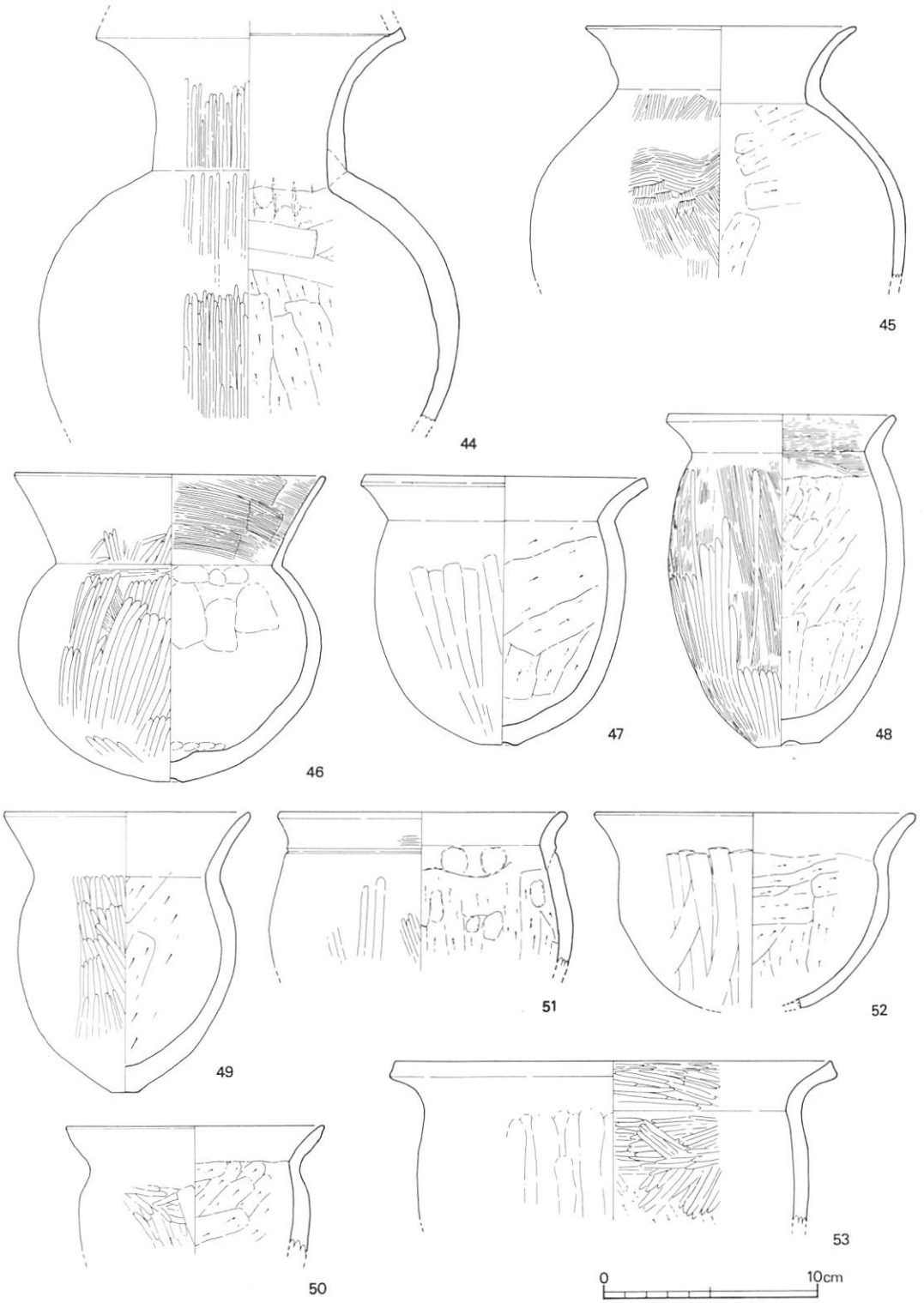
第13図　SK 03 出土土器実測図（III）（1：3）



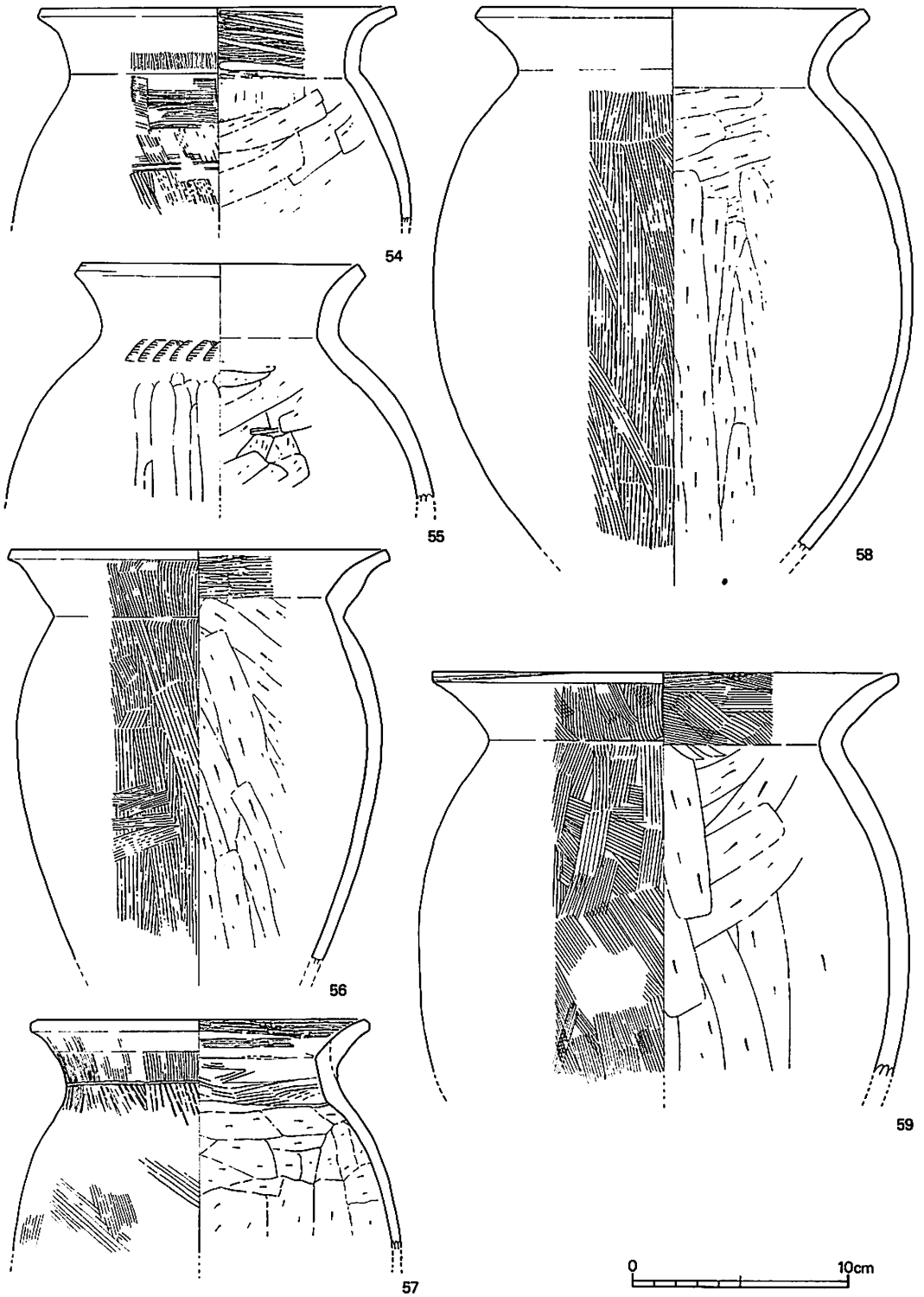
第14図　SK 03 出土土器実測図（IV）（1：4）



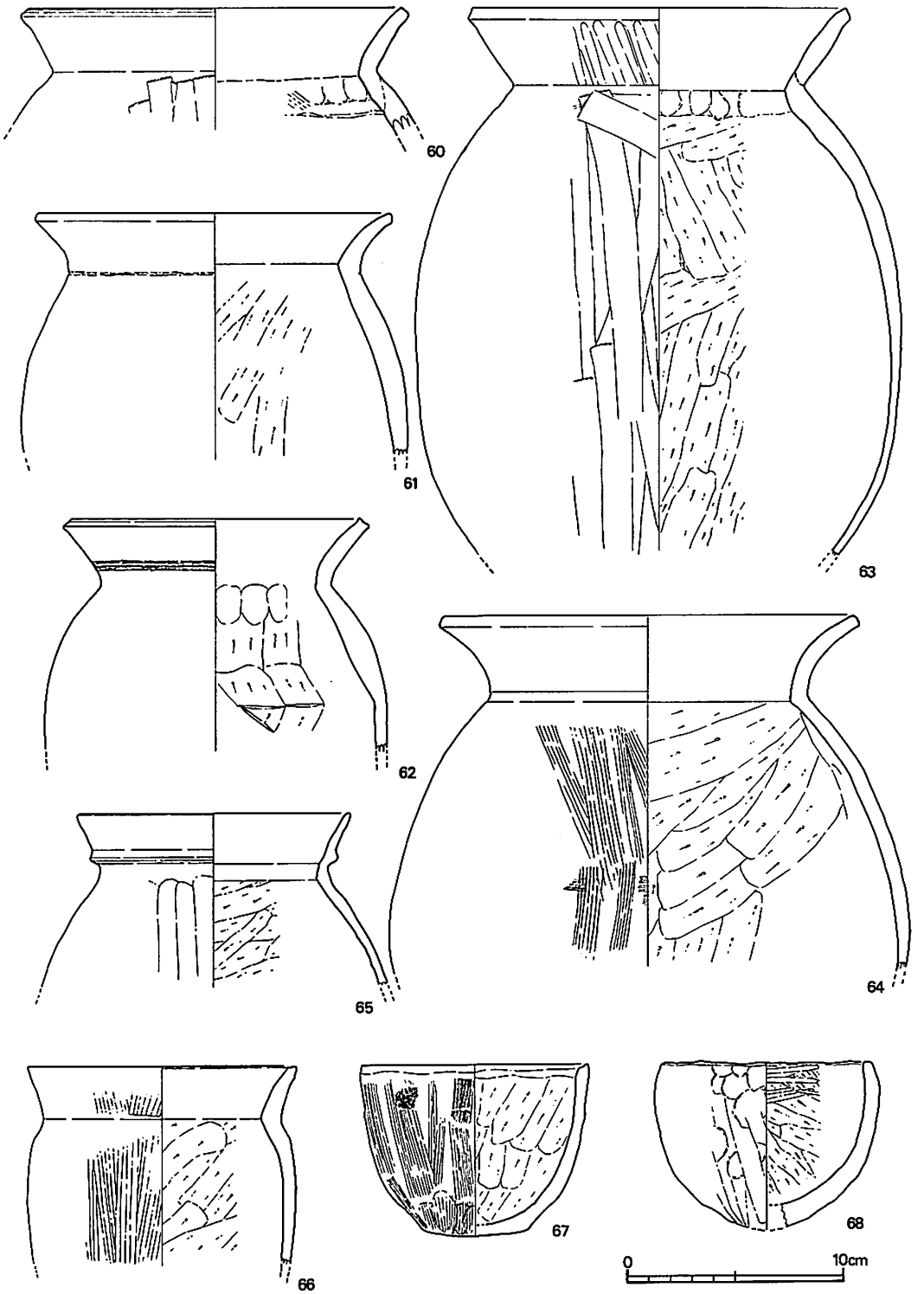
第15図　SK 03 出土土器実測図（V）（1：3）



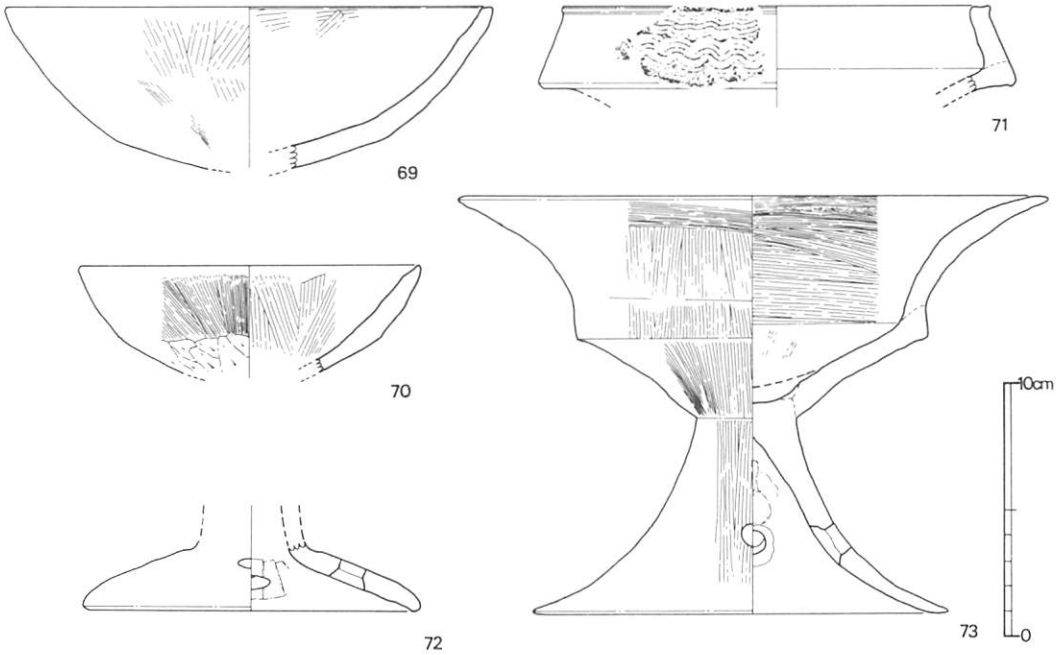
第16図　貝塚出土土器実測図（Ⅰ）（1：3）



第17図　貝塚出土土器実測図（II）（1：3）



第18図　貝塚出土土器実測図（Ⅲ）（1：3）



第19図　貝塚出土土器実測図（IV）（1：3）

出土土器観察表

No.	器形	法　量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備　　考
1	壺 D_1	口径　14.1 器高　12.6	口縁部は緩やかに外反し，端部は丸くおさめる。体部は球体状を呈し，よく張り，底部は小さく若干凹む。	口端部内外面横ナデ，頸部にかけてはナデ。体部外面は細かな縦位のヘラ磨き，内面は，頸部付近横位，体部から底部にかけては斜位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡黄茶褐色。 焼成：良好。
2	壺 D_1	口径　12.9 現高　14.5	口縁部は緩やかに外反し，端部は矩形を呈する。体部は球体状を呈し，最大胴径は体部中位より，やや上方にある。底部は小さい。	口端部内外面横ナデ，頸部にかけては外面縦位の細かなヘラ磨き，内面は板状工具によるナデ。体部外面は縦位の細かなヘラ磨き，内面は，頸部付近横位，体部から底部にかけて斜位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：黄橙色。 焼成：良好。
3	壺 D_1	口径　13.6 器高　14.0	口縁部は緩やかに外反し，端部は矩形を呈する。体部は球体状を呈し，よく張る。底部は小さい。	口端部内外面横ナデ，頸部にかけては外面縦位の板状工具によるナデ，内面はナデ。体部外面は細かな縦位の刷毛，内面は斜位のヘラ削り。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色～淡黄褐色。 焼成：良好。
4	壺 D_1	口径(推) 15.5 現高　　8.2	口縁部は強く外湾気味に外反し，端部は矩形を呈する。	口端部内外面横ナデ，頸部にかけては外面縦位のナデ，内面は粗い横位の刷毛。体部外面は，やや粗い縦位の刷毛，内面は斜位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗黄褐色～赤褐色。 焼成：良好。
5	鉢 C_1	口径　12.4 器高　11.2	口縁部は直線的に外上方に開き，端部は矩形を呈する。体部は球体状を呈し，最大胴径は頸部直下にある。底部は小さくやや凹む。	口端部内外面横ナデ，頸部にかけては内外面とも横位の細かいヘラ磨き。体部外面は頸部より中位にかけ横位の，底部にかけては縦位の細かいヘラ磨き。内面は頸部付近横位，底部にかけては縦位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：黄橙色～暗茶褐色。 焼成：良好。
6	壺 D_2	現高　12.5	口縁部は強く外反して短く外上方にのびる。体部は球体状を呈し，底部にかけてやや尖る。底部は極わずかに遺存し凹む。	口縁部外面斜位の刷毛目を残す。体部外面は一部斜位ないし縦位の刷毛目を残す。内面は斜位のヘラ削り，底部付近に指頭による押圧痕。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。
7	長頸壺 E	口径(推)　9.3 現高　　15.5	口縁部は直線的に外上方に長くのび，端部は丸くおさめる。	口端部内外面横ナデ。口縁部外面は中位まで細かな縦位の刷毛，頸部にかけては縦位の刷毛後細かな縦位のヘラ磨き。内面は，細かな横位の刷毛。	胎土：1㎜未満の砂粒を含む。精良。 色調：赤褐色～暗黄褐色。 焼成：良好。
8	壺 C	口径　10.3 現高　17.2	口縁部は緩やかに外反し，端部は矩形を呈する。体部は長胴で最大胴径は中位にある。底部はやや丸みをもつ。	口縁部内外面は横ナデ，頸部にかけては外面ナデか。指頭圧痕を残す。内面は縦位のナデ，体部外面は上半粗い縦位の刷毛，下半は刷	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色。 焼成：良好。

				毛後のヘラナデ。内面は縦位のヘラ削り。	
9	甕 C_2	現高　12.0	体部はやや胴長で最大胴径は中位にあり，底部にかけてやや尖る。	口縁部内面細かなヘラ磨き。体部外面は中位にかけて細かな縦位のヘラ磨き。底部にかけては細かいヘラナデ。内面は縦位のヘラ削り。頸部付近に指頭圧痕。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色。 焼成：良好。
10	鉢 A	口径(推) 12.6	口縁部は短く直線的に外上方に開き，端部は矩形を呈する。体部は最大径にかけて緩やかにカーブし，下半に続く。	口端部内外面は横ナデ，頸部より体部にかけての外面は細かな縦位の刷毛。口縁部内面は細かな横位の刷毛，体部内面は頸部付近横位，中位にかけて斜位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗赤褐色。 焼成：良好。
11	甕 D		口縁部は「く」字状に屈曲して外上方に開き，端部は丸くおさめる。体部は緩やかにカーブして最大胴径付近に続く。	体部外面ヘラナデ。内面斜位のヘラ削り。頸部付近に指頭圧痕。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗黄褐色～暗赤褐色。 焼成：普通。
12	鉢 B	口径　10.5 器高　13.5	口縁部は短く外湾気味に外反し，端部は丸くおさめる。体部はやや長胴型で最大胴径は体部下半にある。底部は平底で小さい。	口縁部内外面横ナデ。体部外面は頸部付近ナデ，中位より底部にかけ粗い縦位の刷毛，底部付近は横ナデ。内面は斜位又は縦位のヘラ削り。底部外面横ナデ。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：明橙色～淡黄橙色。 焼成：良好。 外面に煤付着。
13	鉢 A	口径　16.6 現高　14.5	口縁部は短く緩やかに外反し，端部は矩形を呈する。体部は球体状を呈し底部へ続く。底部は平底状で小さい。	口端部内外面横ナデ。口縁部内面粗い横位の刷毛後ナデ，体部外面は斜位の板ナデ，内面は頸部付近横位，底部にかけては斜位又は縦位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色～暗黄褐色。 焼成：良好。
14	甕 C_1	口径　13.6 現高　12.4	口縁部は緩やかに外湾気味に外反し，中ほどでやや肥厚し，端部は丸くおさめる。体部は中位にかけ緩やかにカーブし，下半にかけてはやや直線的にすぼまる。	口縁部内外面横ナデ。体部外面は粗い縦位の刷毛，内面は斜位又は縦位のヘラ削り。頸部内面にわずかに指頭圧痕。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色～暗黄褐色。 焼成：普通。 外面に煤付着。
15	甕 C_1	口径(推) 14.2 現高　　7.7	口縁部はやや外湾気味に外反し，端部は丸くおさめる。体部は中位にかけ緩やかにカーブして下る。	口端部内外面及び口頸部外面横ナデし，口縁部内面は，やや粗い横位の刷毛。体部外面は，細かな縦位の刷毛，内面は頸部付近横位，中位にかけ斜位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。
16	甕 B_1	口径(推) 16.2 現高　　10.2	口縁部は「く」字形に屈曲し外上方にのび中ほどでやや肥厚する。端部は矩形を呈する。体部は緩やかにカーブして開く。	口縁部内外面横ナデ，体部外面は板ナデ。内面は頸部付近斜位，中位にかけ縦位のヘラ削り。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：明赤褐色。 焼成：良好。 外面に煤付着。
17	甕 B_1	口径　13.5 現高　10.9	口縁部は「く」字状に屈曲し，外上方にのび，中ほどでやや肥厚する。端部は矩形を呈する。体部は中位に	口端部内外面及び口縁部外面横ナデ，内面はナデ。体部外面は板ナデ後のヘラナデ，内面は縦位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。

			かけ丸くカーブする。		外面に煤付着。
18	甕 B_1	口径　14.9	口縁部は「く」字形に強く屈曲し，外上方にのび中ほどでやや肥厚する。端部は矩形を呈する。体部は緩やかにカーブし，大きく開く。	口端部内外面及び口縁部外面横ナデ，及び斜位のナデ，内面は細かな横位の刷毛。頸部外面縦位及び斜位の細かな刷毛。体部中位にかけて縦位の刷毛。体部内面は斜位及び横位のヘラ削り。頸部外面にヘラ状工具による刺突文。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色～暗黄褐色。 焼成：良好。 外面にわずかに煤付着。
19	甕 B_2	口径(推) 13.1 現高　17.3	口縁部は「く」字形に緩やかに外反して上方にのび，端部は矩形を呈する。体部はやや倒卵形を呈し，最大胴径は体部中位付近にある。	口端部内外面横ナデ。口縁部内外面粗い横位の刷毛後ナデ。体部外面は粗い縦位の刷毛後ナデ。内面は，縦位のヘラ削り。頸部付近に指頭圧痕。頸部外面に列点文。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。
20	甕 B_1	口径(推) 15.6	口縁部は「く」字形に強く屈曲し，外上方にやや肥厚してのび，端部は矩形を呈する。体部は緩やかにカーブして開き下方に続く。	口端部内外面横ナデ。口縁部外面細かい縦位の刷毛，内面は細かな横位の刷毛。体部外面は細かな縦位の刷毛，内面は頸部付近及び中位にかけ斜位のヘラ削りを行うが削りの方向が異なる。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色～淡黄褐色。 焼成：普通。 体部外面にわずかに煤付着。
21	甕 C_1	口径(推) 16.7	口縁部はやや肥厚して垂直気味に短く立上った後緩やかに外反し端部は丸くおさめる。体部はやや直線的に外下方に開く。	口端部内外面横ナデ。口縁部外面粗い縦位の刷毛，内面はやや粗い横位の刷毛後ナデ。体部外面は縦位を基本として一部横位の細かい刷毛，内面は斜位のヘラ削り。	胎土：1㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色。 焼成：良好。
22	甕 B_2	口径　15.1 現高　13.5	口縁部は強く外反して外上方にのび，端部は丸くおさめる。体部は中位にかけ丸くカーブし最大胴径付近はよく張る。	口端部内外面横ナデ。口縁部外面はやや粗い縦位の刷毛後中位までナデ消している。内面はやや粗い横位の刷毛。体部外面はやや粗い縦位及び斜位の刷毛，内面は頸部付近やや粗い斜位の刷毛後縦位のヘラ削り。下方にかけては縦位のヘラ削り。頸部付近に指頭圧痕。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 口頸部，体部外面に煤付着。
23	甕 B_2	口径(推) 12.6	口縁部は緩やかに外湾気味に外反して上方にのび，端部は矩形を呈する。	口端部内外面は横ナデ。口縁部外面縦位の刷毛，内面はやや雑な横位の刷毛。	胎土：1㎜程度の砂粒を含む。 色調：暗赤褐色。 焼成：良好。
24	甕 C_1	口径(推) 19.2 現高　16.7	口縁部は「く」字形に強く屈曲して外上方にのび，端部は丸くおさめる。体部は緩やかにカーブして中位最大胴径付近でよく張り，下方に続く。	口端部内外面横ナデ，口縁部内外面ナデ。体部外面は斜位のヘラナデ，内面は斜位から縦位のヘラ削り。頸部内面付近にヘラ状工具によるナデの痕跡。	胎土：2～4㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色～暗黄褐色。 焼成：普通。 口頸部，体部外面に煤付着。
25	甕	口径(推) 13.7	口縁部は「く」字形に強く屈曲して外上方にのび，端	口端部内外面及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面横位	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。

	C_1		部は丸くおさめる。	の刷毛。体部外面は頸部より細かい縦位の刷毛，内面はヘラ削り。	色調：淡赤褐色～暗黄褐色。 焼成：普通。 口頸部，体部外面に煤付着。
26	甕 C_1		口縁部は「く」字形に屈曲して外上方に直線的にのび，端部は丸くおさめる。体部はあまり開かず，下方へのびる。	口端部内外面及び口頸部外面横ナデ。体部外面は粗い縦位の刷毛後ナデか。内面は斜位のヘラ削り。口頸部内面指頭圧痕。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗赤褐色～暗黄褐色。 焼成：普通。 口頸部，体部外面に煤付着。
27	甕 C_1	口径　15.3 器高　26.1	口縁部は緩やかに外反して外上方にのび，端部は矩形を呈する。体部は砲弾形を呈し，最大胴径は中位よりやや上方にあり，あまり張らない。底部は平底となる。	口端部内外面横ナデ。口縁部外面縦位の刷毛で頸部付近はナデ消す。内面は横位の刷毛で部分的にヘラ磨き。体部外面は基本的に粗い縦位の刷毛で，頸部直下付近は後に細かい斜位の刷毛，さらにその上を部分的にナデる。内面は斜位から縦位のヘラ削り。頸部付近に櫛歯状工具による刺突文。	胎土：1～2㎜の砂粒を多含。 色調：赤褐色～黒褐色。 焼成：良好。 口頸部，体部外面に煤付着。体部中位下半の1か所に外側から内側へ焼成後の穿孔。
28	甕 A	口径　19.1 器高　22.8	口縁部は肥厚して緩やかに外反して外上方にのび，端部はやや外方に屈曲し，矩形を呈する。体部は倒卵形を呈し，最大胴径は中位より上部にある。底部は平底でわずかに丸みをもつ。	口端部外面及び口縁部外面横ナデ，口縁部内面は縦位の刷毛後ナデ。体部外面は細かな縦位及び斜位の刷毛，内面は斜位から縦位のヘラ削り。底部外面刷毛。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 口縁部及び体部外面に煤付着。
29	甕 B_3	現高　33.0	口縁部は緩やかに外反する。体部は長胴で最大胴径は中位にある。底部は平底となる。	体部外面は頸部より中位にかけ右上りないし横位の叩き，この後部分的に細かな縦位の刷毛。中位より底部直上にかけて叩き後の細かな縦位及び斜位の刷毛。内面は斜位から縦位の板状工具によるナデ。	胎土：1～4㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗赤褐色。 焼成：良好。
30	甕 B_2	口径　15.6 器高　28.5	口縁部は緩やかに外反して外上方にのび，端部は矩形を呈す。体部はやや倒卵形を呈し，最大胴径はほぼ中位にある。底部は平底となる。	口縁部及び口縁部内外面横ナデ。体部外面は斜位から縦位の細かい刷毛。内面は斜位から縦位のヘラ削り。口縁部に浅い1条の凹線を廻す。	胎土：1～4㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗赤褐色。 焼成：良好。 体部外面に煤付着。
31	甕 B_2	口径(推) 15.6 器高　30.0	口縁部は緩やかに外反して外上方にわずかに内肥してのび，端部は矩形を呈する。体部はやや倒卵形を呈し，最大胴径は中位ほどにある。底部は小さく凹む。	口端部内外面及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面ナデ。体部外面は細かな縦位の刷毛後ナデ。内部は斜位及び縦位のヘラ削り。中位ほどより削りの方向が異なる。頸部内面にナデ痕。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色～暗褐色。 焼成：良好。 体部外面に煤付着。
32	甕	口径(推) 18.2 現高　19.7	口縁部は「く」字形に強く外湾気味に外反し，中ほど	口端部内外面横ナデ。口縁部外面細かい縦位の刷毛，	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。

	B_2		がやや肥厚し，端部は矩形を呈する。体部は最大胴径にかけ大きくカーブし最大胴径部は強く張る。	内面粗い横位の刷毛。体部外面は縦位の刷毛，内面は縦位のヘラ削り。頸部内面に指頭によるナデ。	色調：淡赤褐色～淡黄褐色。 焼成：良好。 体部外面に煤付着。
33	甕 C_1	口径（推）11.6 現高　12.0	口縁部は外反して外上方にのび，端部は丸くおさめる。体部は緩やかにカーブして外下方に開きのびる。最大胴径部はあまり張らない。	口端部内外面及び口縁部内面横ナデ，口縁部外面細かい刷毛後ナデ。体部外面は細かい縦位の刷毛で一部横位の刷毛。内面は縦位のヘラ削り。頸部付近指頭圧痕。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色。 焼成：良好。 口縁部外面に煤付着。
34	甕 F		口縁部はいわゆる二重口縁で，短く外反した擬口縁がさらに外上方にやや肥厚してのび，端部は丸くおさめる。	口端部内外面及び口縁部外面横ナデ，内面は細かな横位のヘラ磨き。頸部下半はヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を含む。 色調：黄橙色～明赤褐色。 焼成：良好。
35	甕 F		口縁部はいわゆる二重口縁で短く外反した擬口縁よりさらに外上方にやや外湾気味に外反して上方にのび，端部はわずかに外方に屈曲し，丸くおさめる。擬口縁部は外下方にわずかに拡張。	口端部より頸部にかけ内外面とも横ナデ。	胎土：1㎜未満の砂粒を含む。精良。 色調：黄灰色～黒褐色。 焼成：良好。 口縁部外面に煤付着。
36	甕 E	口径（推）14.2	口縁部はいわゆる二重口縁で短く直線的外上方にのびた擬口縁よりさらに垂直気味に短く立上り，端部は平坦となる。体部は緩やかにカーブした下方に開くが，胴はあまり張らない。	口端部より頸部にかけ内外面とも横ナデ。体部内面斜位のヘラ削り後ナデ。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗褐色～暗黄褐色。 焼成：普通。 口縁部及び体部外面煤付着。二次焼成を強く受ける。
37	鉢 E_2	口径（推）16.4 器高　6.7	底部はやや凹凸を有する平底で，体部にかけては緩やかにカーブする。体部は緩やかに内湾して立上り，口端部はやや尖る。	口端部内外面横ナデ。体部及び底部外面ナデ，内面は横位のヘラ削り。体部と底部との境付近に指頭圧痕。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：普通。
38	鉢 F_3	口径　17.5 器高　8.8	底部は極小さく尖底気味となる。体部にかけては緩やかにカーブする。体部は緩やかに内湾して立上り，口端部はやや内傾し，丸くおさめる。	口端部内外面横ナデ。体部外面は縦位のナデ。内面，体部，中位にかけては横位のナデ。底部は縦位のナデ。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色～淡黄褐色。 焼成：良好。
39	鉢 F_2	口径（推）11.8	体部はやや内湾気味に外上方にのび，口端部は丸くおさめる。	口端部内外面横ナデ。体部外面はやや粗い縦位の刷毛，内面は横位のヘラ削り。口端部直下に浅い1条の凹線を廻す。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色～暗黄褐色。 焼成：良好。
40	鉢 F_2	口径　14.3 現高　8.3	体部は緩やかに内湾して立上り，口端部はやや内傾して丸くおさめる。	口端面横ナデ。体部外面縦位の刷毛。但し口端部より中位と底部付近の調整具は異なる。内面は口端部より中位にかけ斜位の刷毛，底部にかけては斜位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗黄褐色～淡赤褐色。 焼成：良好。
41	鉢	口径　12.9	底部は尖底で，体部にかけ	口端部より体部上位外面は	胎土：1～2㎜程度の砂

	F_2	器高　7.9	ては強く内湾する。体部は内湾して立上り，口端部は丸くおさめる。	細かな斜位の刷毛，中位より底部にかけての外面は細かな斜位の刷毛後，部分的にヘラ磨き。口端部より体部中位にかけての内面は，斜位の刷毛後横ナデ。底部にかけては不定方向へのナデ。	粒を多含。 色調：暗黄褐色～淡赤褐色。 焼成：普通。
42	底部	底径　3.3	底部は平底で小さくやや凹む。体部にかけては緩やかにカーブする。	体部外面細かな縦位の刷毛，内面は斜位のヘラ削り。底部外面不定方向への細かな刷毛。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：茶褐色。 焼成：普通。
43	底部	底径　5.7	底部は平底でやや丸みをもつ。体部にかけては緩やかにカーブする。	体部外面はやや粗い縦位の刷毛。内面はヘラナデ。底部外面ヘラナデ。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色～黄褐色。 焼成：普通。
44	壺 A_2	擬口縁径(推)　14.5 現高　18.3	いわゆる二重口縁（袋状口縁）になるもので，口縁部は直立気味に立上った後，緩やかに外湾して外上方にのび，擬口縁端部は矩形を呈し，端部内面はやや凹む。体部は球体形を呈し，最大胴径付近は強く張る。	擬口縁端部内外面横ナデ，口縁部外面は縦位の暗文風ヘラ磨き，内面はナデ。頸部内面にはしぼり目及び指頭圧痕を残す。体部外面は縦位の暗文風ヘラ磨き。内面は中位にかけ横位の板ナデ，下半は縦位のヘラ削り。擬口縁端部内面に接合痕を残す。また口縁部より体部にかけての外面丹塗り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を含む。精良。 色調：赤褐色～暗黄褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
45	壺 B	口径(推)　12.5 現高　11.9	口縁部は緩やかに外反して外上方にのび端部は丸くおさめる。体部は大きくカーブして下方にのび，最大胴径付近は強く張る。	口端部及び口縁部内外面は横ナデ。体部外面は上位はやや粗い縦位の刷毛後ナデ。中位より下位はやや細かな縦位の刷毛。体部内面は横位から縦位のヘラ削り。体部外面中位直上に刷毛状工具による波状文。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。 貝塚下面。
46	壺 D_2	口径(推)　14.4 器高　14.2	口縁部はほぼ直線的に外上方にのび，端部は丸くおさめる。体部は球体形を呈し，胴はよく張る。底部は極わずかに遺存するのみで，やや凹む。	口端部内外面横ナデ。口縁部外面下半縦位のヘラ磨き，内面は細かい横位の刷毛。体部外面は細かい縦位の刷毛後細かい縦位のヘラ磨き。内面は頸部付近指頭による押圧，中位付近ナデ。	胎土：1㎜未満の砂粒を含む。精良。 色調：淡赤褐色～淡黄褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
47	鉢 C_1	口径　13.1 器高　12.5	口縁部は「く」字形に外湾気味に外反してのび端部は矩形を呈する。体部はあまり張らず，最大胴径は中位よりやや上にある。底部は極小さく凹む。	口端部及び口縁部内外面横ナデ。頸部外面は縦位のナデ。体部外面は縦位のヘラナデ，内面は斜位から縦位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗黄褐色～淡赤褐色。 焼成：良好。 二次焼成を受けたため器面剥落が著しい。
48	甕 C_2	口径　10.5 器高　15.4	口縁部は外湾気味に外反してのびる。体部は倒卵形状を呈し，最大胴径は上半部にある。底部は平底で，中	口頸部は外面横ナデ，内面は横位刷毛後口縁部のみ横ナデ。体部は縦位刷毛後下半を縦位のヘラ磨き。内面	胎土：1～2㎜程度の砂粒を含む。 色調：赤褐色～黒褐色。 焼成：良好。

			央が凹む。	は斜位のヘラ削り。	SK 03 か。
49	甕 D	口径(推) 12.2 器高 11.6	口縁部は緩やかに外反しのびる。体部は倒卵形状を呈し，最大胴径は中央付近にある。	口頸部は内外面横ナデ。体部は外面ヘラ磨き，内面は斜位のヘラ削り。また口縁部より体部にかけての外面は丹塗り。	胎土：2～4 mm 程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
50	甕 D	口径(推) 11.9 現高 5.7	口縁部は「く」字形に外反し，端部が若干細い。体部は球体状を呈し，最大胴径は上半部にある。	口頸部は内外面横ナデ。体部は外面荒いヘラ磨き，内面は斜位のヘラ削り。	胎土：1～2 mm 程度の砂粒を含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 貝塚下面。
51	鉢 A	口径(推) 13.2 現高 7.2	口縁部は緩く外反し，端部は丸くおさめる。頸部に沈線状の段を有し，体部はやや張る。	口頸部は内外面横ナデ。体部は外面縦位ヘラナデ，内面は縦位のヘラ削り。内面頸部下方に貼付け痕を残す。	胎土：1～2 mm 程度の砂粒を含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
52	鉢 C_2	口径(推) 14.9 現高 9.1	口縁部は緩く外反し，端部は丸くおさめる。体部は緩いカーブを呈する。	口頸部は内外面横ナデ。体部は外面縦位板ナデ，内面は上半が横位，下半が縦位のヘラ削り。	胎土：1～2 mm 程度の砂粒を含む。 色調：黄褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
53	鉢 D	口径(推) 20.3 現高 7.4	口縁部は緩く外反し，端部は若干肥厚する。体部はあまり張らず，最大胴径は上半部にある。	口縁部外面は横ナデ，内面は横位のヘラ磨き。体部は外面は縦位のヘラナデ，内面は削りの上に荒いヘラ磨き。	胎土：1～3 mm 程度の砂粒を多含。 色調：暗赤褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
54	甕 B_2	口径 16.3 現高 10.0	口縁部は強く外反し，端部は平坦気味を呈する。体部は頸部より緩やかにカーブして開き，下方につづく。	口縁部外面は上半が横ナデ，下半は縦位刷毛，内面は横位刷毛の上を荒いヘラ磨き。体部は上部が横位，下部は縦位の刷毛を施し，その上に荒いヘラ磨き。内面は斜位のヘラ削り。	胎土：2～4 mm 程度の砂粒を多含。 色調：暗赤褐色。 焼成：良好。 貝塚中～下。
55	甕 B_2	口径 12.7 現高 10.7	口縁部は外反し，端部は平坦状を呈する。体部は頸部より大きくカーブして開き，下方につづくが肩部が若干張る。	口縁部は内外面横ナデ。体部は外面縦位のヘラナデ，内面は斜位のヘラ削り。頸部は櫛歯状工具による刺突文。	胎土：1～4 mm 程度の砂粒を多含。 色調：暗赤褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
56	甕 A	口径 17.4 現高 18.7	口縁部は外反し，口頸部の器壁は厚い。端部は平坦気味を呈する。体部は倒卵形状で最大胴径は上半部にある。	口端部は横ナデ。口頸部外面縦位刷毛，内面は横位の荒いヘラ磨き。体部は外面縦位刷毛，内面は斜位ヘラ削り。	胎土：1～2 mm 程度の砂粒を多含。 色調：暗赤褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
57	甕 B_2	口径 15.2 現高 10.6	口縁部は外反し，口頸部の器壁は厚い。端部は丸くおさめる。体部は頸部より緩やかにカーブして開き，下方につづく。	口端部は横ナデ。口頸部外面は縦位刷毛後横ナデ，内面は横位刷毛後横ナデ。体部外面は斜位刷毛，内面は下方が縦位，上方は斜位ヘラ削り。頸部には沈線状の段をもつ。	胎土：1～2 mm 程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
58	甕	口径 17.6 現高 24.9	口縁部は外湾気味に外反し，端部は矩形を呈する。体部	口縁部内外面は横ナデ。体部外面は縦位刷毛で，3段	胎土：1～4 mm 程度の砂粒を多含。

	B_2		は頸部より大きくカーブして開き，下方につづく。最大胴径は中位にあり，よく張る。	に分けて調整。内面は上方は横位，下半は縦位のヘラ削り。	色調：赤褐色～黒褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
59	甕 B_2	口径(推) 21.5 現高 18.4	口縁部は外湾気味に外反し，端部は平坦状を呈する。体部は頸部より大きくカーブして開き，下方につづく。最大胴径は中位にある。	口頸部は内外面共に刷毛。体部は外面斜位刷毛後，縦位の荒い刷毛。内面は下方が縦位のヘラ削り，上方は斜位のヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
60	甕 B_1	口径(推) 17.3 現高 5.9	口縁部は外湾気味に外反し，端部は平坦を呈し，1条の擬凹線を入れる。体部は頸部より大きくカーブして開く。	口頸部は内外面共に横ナデ。体部は外面板ナデ，内面は指頭圧痕を有する。頸部下方には接合痕を残す。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を含む。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
61	甕 B_1	口径(推) 16.2 現高 11.1	口縁部は外反し，端部は平坦を呈する。体部は頸部より緩くカーブし，下方につづく。	口頸部は内外面共に横ナデ。体部は外面ナデ，内面は斜位のヘラ削り。頸部には沈線状の段を有する。	胎土：2～4㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
62	甕 B_1	口径 13.2 現高 10.5	口縁部は外湾気味に外反し，端部は若干凹み気味。体部は頸部より緩くカーブして開き，下方につづく。	口頸部は外面横ナデ，内面はナデ。体部は外面板ナデ，内面は斜位のヘラ削り。口頸部に数条の条線を有する。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を含む。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
63	甕 B_1	口径 17.3 現高 25.1	口縁部は外反し，端部は若干凹み気味。体部は頸部より緩くカーブして開き，下方につづく。	口頸部は内外面横ナデ後，外面に暗文状のヘラ磨き。体部は外面縦位板ナデ，内面は斜位ヘラ削り。	胎土：2～4㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
64	甕 B_2	口径 18.8 現高 16.4	口縁部は外反し，端部は平坦気味。体部は頸部より緩くカーブして開き，若干張る。	口頸部は内外面横ナデ。体部は外面斜位刷毛，内面は斜位ヘラ削り。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
65	甕 F	口径(推) 12.0 現高 7.9	口縁部はいわゆる二重口縁で，短く外反した擬口縁部上にさらに外上方に外反してのびる口縁部を付す。体部は頸部より緩くカーブして下方に続く。	口頸部は内外面共に横ナデ。体部は外面縦位ヘラナデ，内面は斜位ヘラ削り。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：明黄褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
66	鉢 D	口径(推) 12.4 現高 9.0	口縁部は緩やかに外反して外上方にのび，端部はやや尖る。体部はあまり張らず，肩部より直線的に下方につづく。	口頸部外面は，やや粗い縦位の刷毛後横ナデ，内面は横ナデ。体部外面は，やや粗い縦位の刷毛，内面は斜位のヘラ削り。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：黄褐色。 焼成：普通。 貝塚上面。
67	鉢 E_1	器高 7.9	底部は平底でやや丸みをもつ。体部にかけては強く内湾して立上り，体部はやや内湾気味に上方にのび，口端部は内傾する。	口端部内外面ナデ，体部外面は細かい縦位の刷毛。内面は縦位のヘラ削り。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色。 焼成：良好。 貝塚下面。
68	鉢	口径 9.5 現高 7.5	底部は尖底で，体部にかけて強く内湾して立上り，体	口端部内外面ナデ。体部外面上半指頭による押圧，下	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。

	F_1		部は内湾気味に上方へのび，口端部は矩形を呈する。	半は板ナデ。内面上位は部分的にヘラ磨き，中位より底部にかけ斜位のヘラ削り。	色調：淡赤褐色～淡黄褐色。 焼成：良好。 貝塚中。
69	鉢 F_1	口径（推）19.3	底部より体部にかけては緩やかにカーブし，体部は内湾気味に立上って上方にのび，口端部はわずかに平坦面を作る。	口端部内外面は横ナデ。体部外面はやや粗い斜位の刷毛，内面は上位やや粗い横位の刷毛，下半は刷毛後のナデ。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色～淡黄褐色。 焼成：普通。 SK 03，貝塚上面。
70	鉢 F_3	口径（推）13.5	底部と体部との境にあまい稜線を有し，体部はやや肥厚して外上方にのび，口端部はやや尖る。	口端部内外面は横ナデ。体部外面は細かい縦位の刷毛，底部にかけては斜位のヘラ削り。内面は縦位及び横位の刷毛。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：淡赤褐色。 焼成：良好。 貝塚上面。
71	壺 A_1		いわゆる二重口縁の擬口縁より内傾して立上るもので，端部はやや外面に拡張し，上面は平坦となる。	口縁部内外面とも横ナデ。口縁部外面に2段にわたって櫛描き波状文を施す。	胎土：1～2㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗黄褐色～淡赤褐色。 焼成：良好。 貝塚上面，中。
72	高杯 A	脚端径（推） 13.2	脚部は，脚柱部より強く屈曲して外下方に開き，端部は丸くおさめる。	端部内外面及び脚部外面は横ナデし，内面は板ナデ。脚部4か所に外側から内側へ穿孔した円形透し。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：暗茶褐色。 焼成：普通。 貝塚上面。
73	高杯 B	口径　23.4 器高　16.6	杯底部は外上方にのび，体部との境は明瞭な稜線を有す。体部は強く外反して外上方にのび，端部は丸くおさめる。脚部は強くラッパ状に開き，端部はやや尖る。	口端部内外面横ナデ。体部外面は細かな横位の刷毛から縦位の刷毛。内面は細かな横位の刷毛，杯底部外面は縦位の刷毛，内面は縦位の刷毛後磨状のナデ。脚部は端部内外面横ナデ，脚柱部外面縦位の刷毛，内面指頭による押圧，脚裾部外面刷毛後のナデ，内面ナデ。裾部に焼成後の円孔を4か所穿つ。	胎土：1～3㎜程度の砂粒を多含。 色調：赤褐色。 焼成：良好。 貝塚上面，中。

(V) まとめ

本遺跡の発掘調査によって，住居跡（SB 01）1，土壙 2（SK 02, 03）及び貝塚を検出した。このうち，土器が多量に出土した土壙（SK 03）と貝塚からは，弥生時代後期後葉の土器の一括資料を得ることができた。この一括資料の詳細については前述したとおりである。近年，広島湾岸における開発に伴って，発掘調査の件数が増加しており，弥生時代後期後半の集落跡や土器の様相が次第に明らかになりつつある。なお，本遺跡がある石内川流域において当該期の遺跡が調査されており，その成果の報告が期待されている。しかし，未調査の遺跡も多いため本遺跡と周辺遺跡とのあり方について若干を述べるにとどめ，ここでは主に本遺跡から出土した土器について述べてまとめとしたい。

(1) 遺構について

本遺跡において検出した遺構のうち，住居跡（SB 01）及び土壙（SK 02）は，遺物が皆無に等しいため，土器が多量に出土した土壙（SK 03）及び貝塚との関係については同時期とする積極的理由には乏しい。しかし，本遺跡では他の時期の遺構や遺物が出土していないこと，各遺構の立地や性格からすると，各遺構が別々に成立したとは考え難く，これらの遺構は同時期のもので，生活単位として有機的に結びついていると考えられる。すなわち，本遺跡は住居跡及びこれに付随する貯蔵穴，貝塚からなりたっているといえる。なお，埋葬場所は本遺跡の付近に存在しているとみられるが，現在のところその場所については明らかではない。

本遺跡の周辺における同時期の遺跡としては，本遺跡の東南約 900 m の丘陵上に浄安寺遺跡がある。この遺跡は，丘陵尾根平坦地や丘陵斜面に住居跡約 60 軒，貯蔵穴 6 基，土壙墓 2 基，土器蓋土壙 2 基，広場とみられる空地などがあることが調査によって知られている。また，住居跡は 7 つのグループに分けることができるなど，弥生時代後期後葉における集落のあり方を知るうえで良好な遺跡といえる。このように本遺跡と浄安寺遺跡とは，住居跡の数や構成に大きな違いが認められる。この違いは 1 遺跡における人口の違いであり，生産基盤の大きさによると考えることができよう。したがって本遺跡は分村的性格をもつといえよう。

本遺跡の周辺では調査が十分及んでいないため，今後の成果を待たなければ当時の集落の様相を知ることはできないが，本遺跡のあり方からすると周辺には，本遺跡と同似，あるいは複数の住居によって生活の単位を構成する遺跡や，本村的性格をもつ遺跡のあることが考えられる。また，これらの遺跡を包括した血縁及び地縁による結びつきによる社会集団，すなわち，石内川流域の一支谷である笹利には，谷水田を生産基盤とした弥生時代後期後葉の集落の広がりがあり，本遺跡はその一部をなしていると考えられる。

(2) 土器について

笹利迫田遺跡から出土した土器は，その大半がSK 03および貝塚からである。出土状態は前述のようにSK 03・貝塚ともに同一斜面上にそれぞれ上下に位置しており，貝塚内に廃棄された土器の一部がSK 03に流入・混在している。この状態は，土壙上の土器群の中に少量の貝類を検出したことからもうかがえる。このため，SK 03および貝塚から出土した土器を一括して扱うことが適当と考えられた。

さて，弥生時代後期～古墳時代初頭，特に安芸地方の土器の編年的研究は，昭和30年代後半の時点から停滞の感がある。この時点で提示された資料は，安佐北区高陽町上深川遺跡出土のものを中心としていた[1]。これと同様なものは，太田川下流域を含む広島湾沿岸一帯に分布の中心がみられるが，遺構に伴う一括性の高い資料が少ない。また，器形の種類が多く，各小水系毎に土器の様相が若干異なっている。このため，整理・細分化が進んでいないのが現状である。ここでは，周辺地域における近年の遺跡調査例をもとに出土状態・形式的変遷などを加味して，分類比定を試みたい。

当該地域で弥生時代後期中葉～古墳時代初頭の変遷をみると，現状では大きく4時期に分けることが可能である。以下，仮に第Ⅰ～Ⅳ期に分けると，第Ⅰ期は恵木遺跡1号住居跡[2]・長う子遺跡1号土壙[3]・真亀遺跡D地点住居跡・同1号土壙[4]・畳谷遺跡A地点1号住居跡[5]・同B地点5号住居跡・王地遺跡土壙[6]・高陽台遺跡群A地点1号土壙[7]・同3号住居跡が該当する[8]。第Ⅱ期は西願寺遺跡C地点4号土壙墓[9]・長う子遺跡2号住居跡[10]。第Ⅲ期は芳ヵ谷遺跡3号住居跡[11]・金平A地点遺跡[12]・西山遺跡1号住居跡[13]・寺迫遺跡1～3号土器棺墓[14]。第Ⅳ期は北山遺跡住居跡[15]などがある。壺形土器は，第Ⅰ期の段階で二重口縁をもつものが出現してくる。これは，この地域の祖形というべきもので[16]，頸部は強くしまり，胴部は最大径が上半～中位にみられ，口縁部の拡張が始まる。口縁部は凹線文を施すもの（畳谷遺跡A地点1号住居跡例）と無文のもの（水晶城跡B地点1号貯蔵穴例[17]）がみられる。第Ⅱ期以後では口縁部の拡張が著しく進み，外面に波状文・竹管文などを施す。また，口縁部が強く内傾するもの（西願寺遺跡C地点4号土壙墓例）もあり，頸部に刻目凸帯を付す。第Ⅲ期は口縁部が外反するものが出現する（寺迫遺跡2号土器棺例）。胴部は倒卵形・球形・楕円形を呈するものがあり，器形も大型・小型品がみられ，この土器が最も発達する段階である。口縁部が外反するのみのものは，第Ⅰ期ではそれまでと同様に口縁部に凹線文をもっているが，新たに無文のものが出現する。第Ⅱ期はこの無文化が進み，凹線文は施しておらず，胴部も球形を呈するものがある。一方，小型品は口頸部が外反し，体部は球体状を呈する（西願寺遺跡C地点土壙墓例）。底部は平底と丸底が混在している。第Ⅲ期は口頸部が外反し，体部は球体状に張るもの（西山遺跡1号住居跡例）へと変化しており，小型品は器壁が薄くなる。甕形土器は，第Ⅰ期の段階で胴部最大径が上半にみられるもの（長う子遺跡1号土壙例）と中位にみられるもの（真亀遺跡D地点1号土壙例）が混在する。両者とも口縁部は若干の拡張を行っており，凹線文を施し

ている。また，この時に口縁部が無文のもの（末光遺跡群B地点3号土壙例[18]）がある。第II期では口縁部の凹線文はみられないが，胴部上半近近に，列点文・刺突文・波状文を施す（長う子遺跡2号住居跡例）が，第III期に至ると，胴部が倒卵形を呈するものがみられ，胴部上半の文様もほとんど施さない。第IV期は長胴で，頸部の屈曲が強くなく，底部は完全な丸底化になる（北山遺跡住居跡例）。鉢形土器は，口縁部が外反するものと，椀状を呈するものがある。前者は，第I期では甕形土器に類似しており，口縁部は若干拡張し，凹線文をもつ。胴部は最大径が上半にみられ，口縁部径と器高の比が1：1前後となる（真亀遺跡D地点住居跡例）。一方，後者はこの段階で出現するが，底部は平底を呈している（末光遺跡群B地点3号土壙例）。第II期以後では，前者としたものは，口縁部に凹線文を有しているものがなくなり，無文のみとなる（西願寺遺跡C地点4号土壙墓例）。また，体部が球体状に張るものがある。これは壺形土器に類似した器形がみられるが，若干頸部径と口縁部径との比が小さい。このことから，両者の系統は同一と考えられる。後者とした椀状を呈するものは，この段階で定量的に存在する。底部は丸底・尖底状の丸底・平底を呈している。第IV期は底部が，すべて丸底化する。高杯形土器は，第I期のものは杯部が浅く，口縁部径に対して杯部高が3：1前後となる。また，杯部と脚部の接合は粘土円板貼付手法による（高陽台遺跡群A地点1号土壙例）。第II期以後，この比が2：1前後と小さくなり，口縁部の屈曲も強くなる。このほかに，椀状を呈する杯部をもつものが第I期で出現している（水晶城跡B地点1号貯蔵穴例）。これは，鉢形土器の椀状を呈するものと同じである。

以上，当該地域の土器についての概観を述べた。本遺跡出土の土器は出土状態・形態・成形手法により形式的まとまりをもち，なおかつ，連続的な流れをみることができる。すなわち，

I類

壺形土器　A_1類・B類・C類・D_1類・E類

甕形土器　A類・B類・C_2類・F類

鉢形土器　A類・B_1類・B_2類・D類・E_1類・F_1類

高杯形土器　B類

II類

壺形土器　A_2類・D_2類

甕形土器　C_1類[19]・D_1類・D_2類・E類・G類

鉢形土器　C類

高杯形土器　A類

の2形式に分類できる。I類は，壺形土器A_1類・D_1類，甕形土器A類・B類，鉢形土器A類・B_1類・B_2類・D類に特徴を残している。特に二重口縁をもつ壺形土器，体部が球体状によく張る小型壺形土器，最大径を胴部上半にもつ甕形土器など，第II期に比定できる内容を有している。一方，II類は，胴部が倒卵形を呈する甕形土器に最大の特徴をもっている。これは第III期

に比定でき，甕形土器 C_1 類（24）は類似するものが，寺迫遺跡1号土器棺・西山遺跡1号住居跡で出土している。次に甕形土器G類としたものは，その分布の中心が中国山地山間部にみられるもので[20]，明らかに非在地系の土器[21]と考えられる。なお，類例としては，矢ヶ谷遺跡1号住居跡[22]・同1号土壙がある。

本遺跡の調査では，当該地域の弥生時代後期後半の土器編年研究上，好資料を得ることができた。笹利迫田Ⅰ・Ⅱ類はこの中で，後半の様相を示すものと考えられる。ところで，前述したように，本遺跡は石内川流域に含まれ，同地域内においては，水晶城跡，浄安寺遺跡など近年数例の調査が行われている。いずれも本遺跡に先行・併行する。今後，これらの遺跡出土の土器を含めて小水系毎の編年作業を行うことにより，当該地域の編年の確立をはかりたい。

註

(1) 潮見　浩「広島県安佐郡高陽町上深川遺跡」『弥生土器集成』資料編　昭和33（1958）年。
松崎寿和・潮見　浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻　昭和36（1961）年。
潮見　浩「山陽地方」『弥生式土器集成』本編　昭和39（1964）年。
潮見　浩・藤田　等「弥生文化の発展と地域性 ―中国・四国―」『日本の考古学』Ⅲ　昭和41（1966）年。

(2) 恵木遺跡発掘調査団『恵木遺跡発掘調査報告』昭和57（1982）年。

(3) 広島市教育委員会「長う子遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』昭和59（1984）年。

(4) 広島県教育委員会「恵下山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』昭和52（1977）年。

(5) 広島県教育委員会「畳谷遺跡」『広島県文化財調査報告』昭和58（1983）年。

(6) 福谷昭二「歴史のあけぼの」『可部町史』昭和51（1976）年。

(7) 広島市教育委員会『高陽台遺跡群発掘調査報告』昭和57（1982）年。

(8) ここで第Ⅰ期としたものは型式的に若干幅がみられ，少なくとも二型式に細分できる。しかし，今回は割愛した。

(9) 広島県教育委員会『西願寺遺跡群』昭和49（1974）年。

(10) 註(3)に同じ。

(11) 広島市教育委員会「芳ヵ谷遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』昭和59（1984）年。

(12) 広島県教育委員会「金平遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』昭和52（1977）年。

(13) 広島県教育委員会「西山・北山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』昭和52（1977）年。

(14) 広島県教育委員会「寺迫遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』昭和52（1977）年。

(15) 註(13)に同じ。

(16) 二重口縁（複合口縁）をもつ壺形土器については，北部九州・山口県西部はこの地域に分布する袋状口縁をもつものからの発達が，東九州のものは在地系のものからの発達と，東からの影響の下

で発生，発達したと考える論考がみられるが，現状では明らかでない。巨視的には同一のものであるが，ある程度の地域性が認められ，地域間の相互作用があったにせよ，基本的には地域毎の発生，発達を考えてもよさそうである。

羽田野光洋 「東九州における弥生式土器研究Ⅰ」『古文化談叢』第5集 昭和53（1978）年。

高橋徹 「廃棄された鏡片」『古文化談叢』第6集 昭和54（1979）年。

武末純一 「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『古文化論集』下巻 昭和57（1982）年。

(17) 水晶城跡は，昭和57年度に当センターが発掘調査し，現在整理中である。

(18) 広島市教育委員会 『末光遺跡群発掘調査報告』 昭和59（1984）年。

(19) 甕形土器 C_1 類は将来，2分類される可能性がある。

(20) 御神田遺跡・境ヶ谷西遺跡（庄原市）・徳市遺跡（双三郡吉舎町）・塩町遺跡（三次市）などに良好な例がみられる。

(21) 非在地系の土器とは，在地系の土器の反語として用いる。すなわち，その地域では系統的に形式変化がたどれないものである。

(22) 矢ヶ谷遺跡発掘調査団 『矢ヶ谷遺跡発掘調査報告』 昭和59（1984）年。

a. 調査前近景（南から）

b. 調査後近景（南東から）

a. SB 01（北東から）

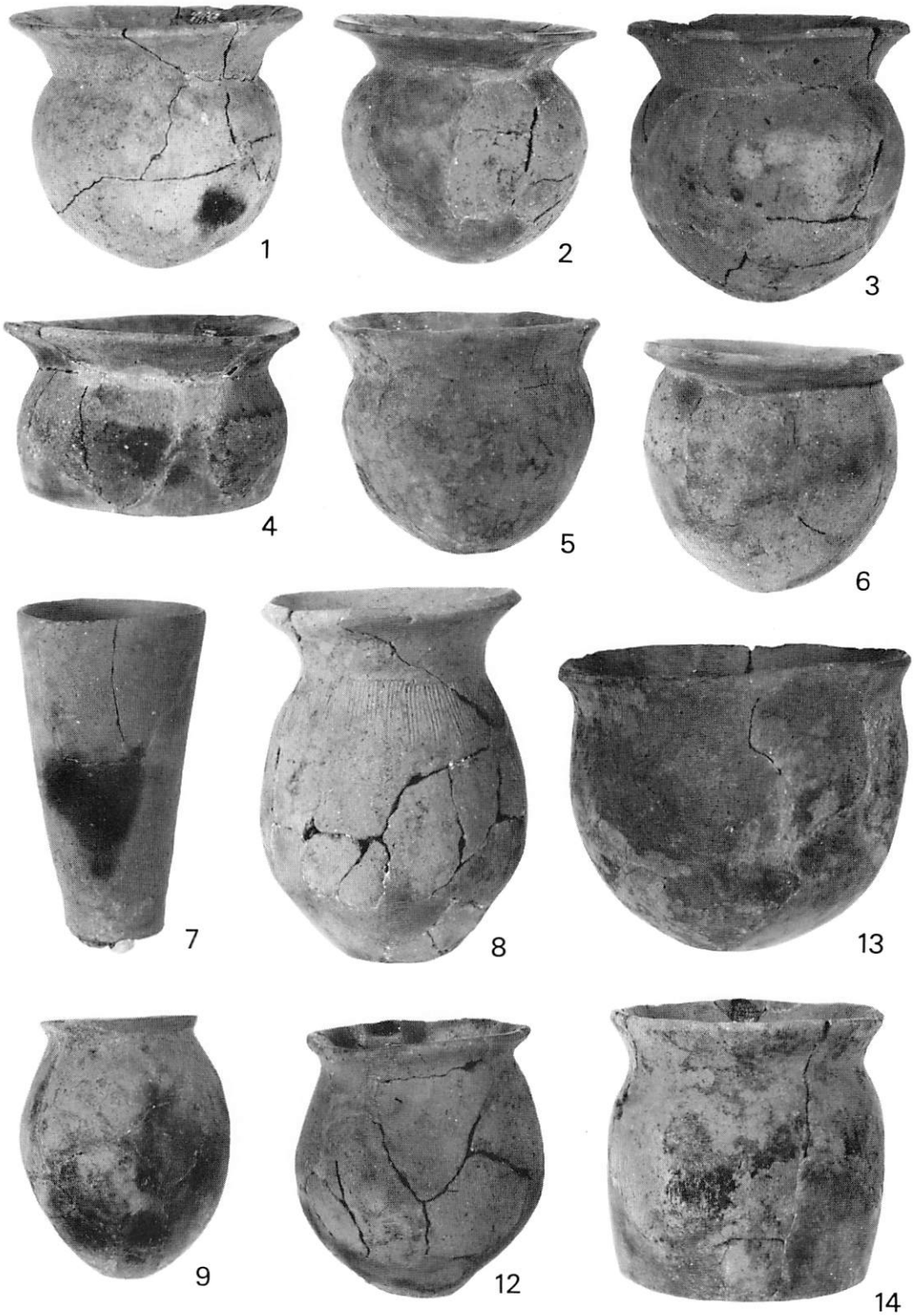
b. SK 02（東から）

a. SK 03 土器出土状況（西から）

b. 同上 完掘状況（西から）

a. 貝塚検出状況（南西から）

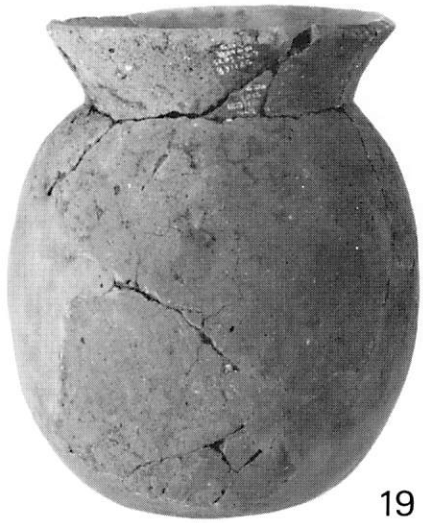
b. 同上（南西から）



SK 03 出土土器（I）

16

17


19

22

21

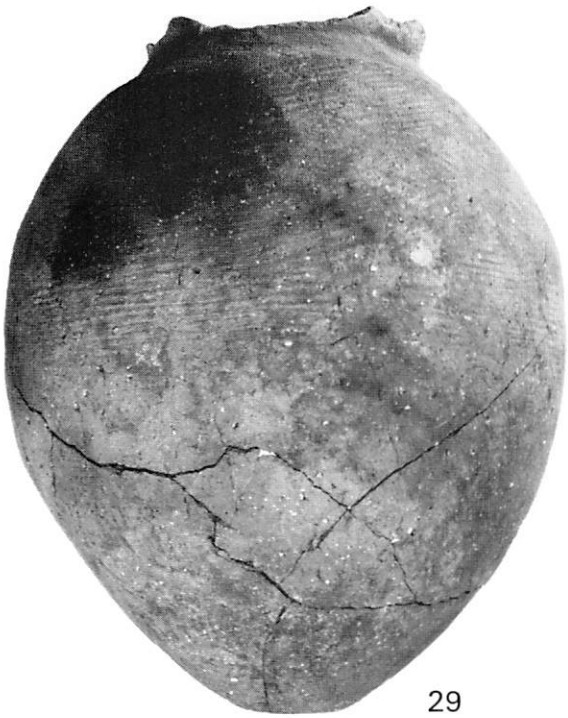
24

SK 03 出土土器（II）

27

26

28



29

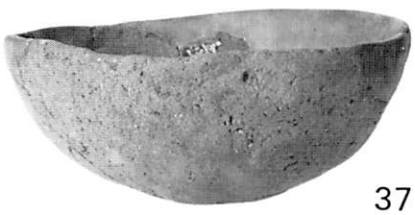
30

SK 03 出土土器（III）

31

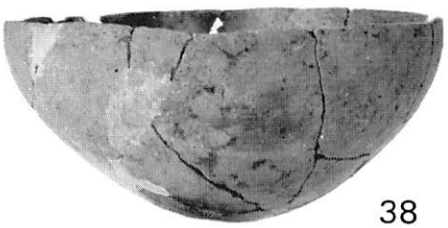
33

36



37

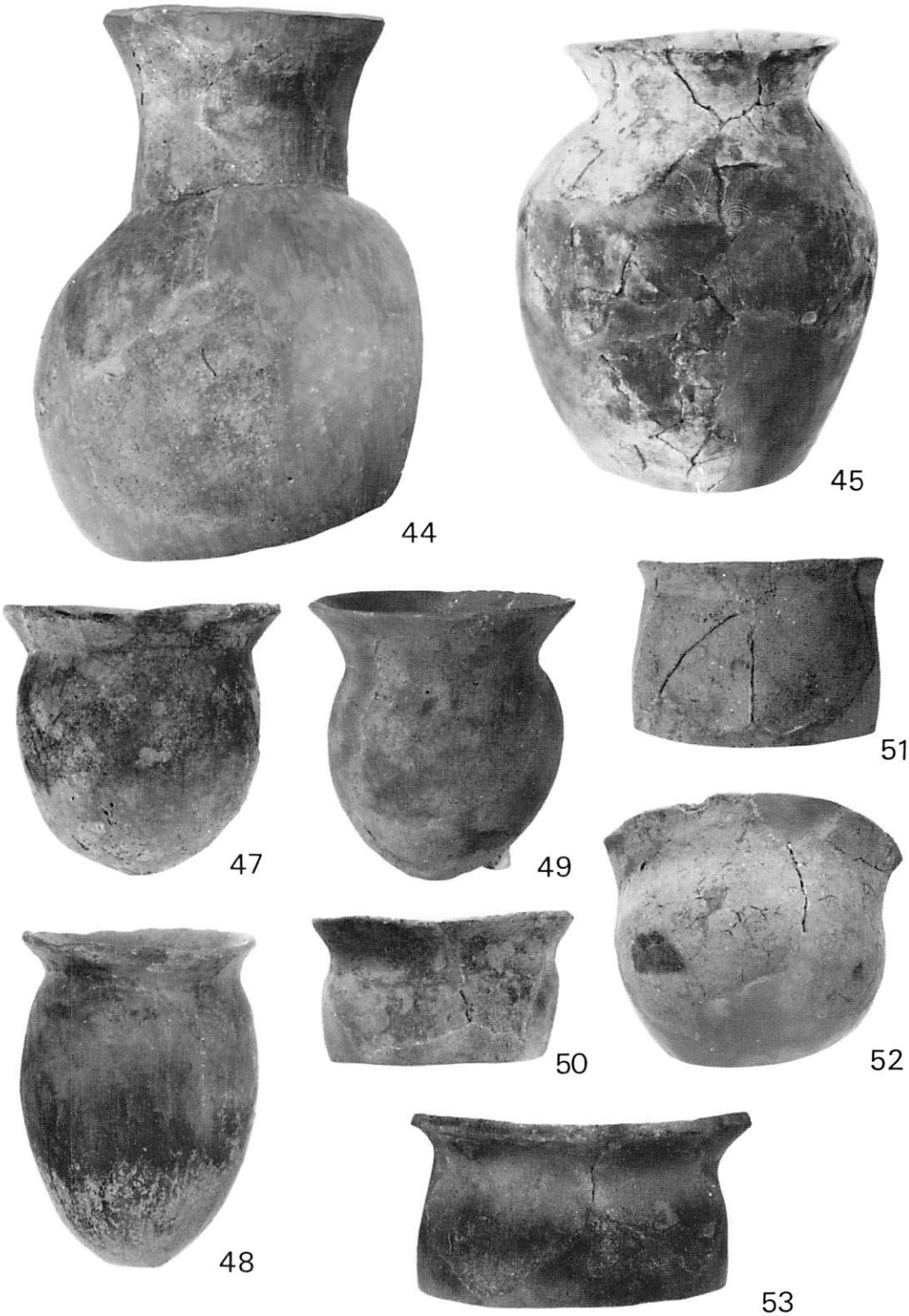
32



38

40

SK 03 出土土器（IV）



貝塚出土土器（Ⅰ）

54

55

56

57

59

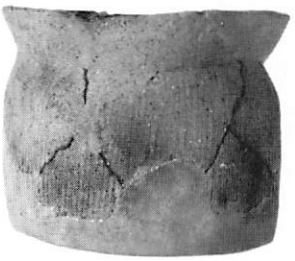
58

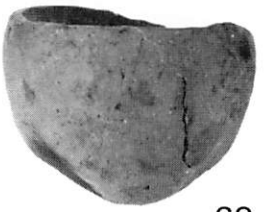
貝塚出土土器（II）

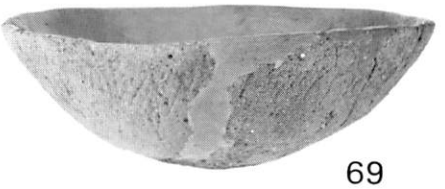
63

64

70


66

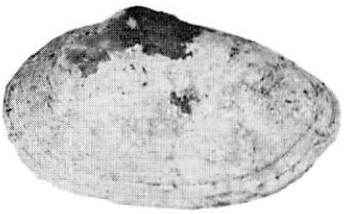

68


69

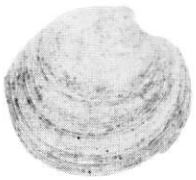
73

貝塚出土土器・鉄器・SB 01 出土石器

マ　ガ　キ



オオノガイ



シジミ

アサリ

シオフキ

サルボウ

ハマグリ

スガイ

マルタニシ

イボウミニナ

出土した主要貝類

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第37集

笹利迫田遺跡発掘調査報告書

発 行 日

昭和60(1985)年3月10日

編集・発行

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

734 広島市西区観音新町4丁目8-49

TEL (082) 295-5751

印 刷 所

電 子 印 刷 株 式 会 社